

中 地 蔵 遺 跡  
発 掘 調 査 報 告 書

2000

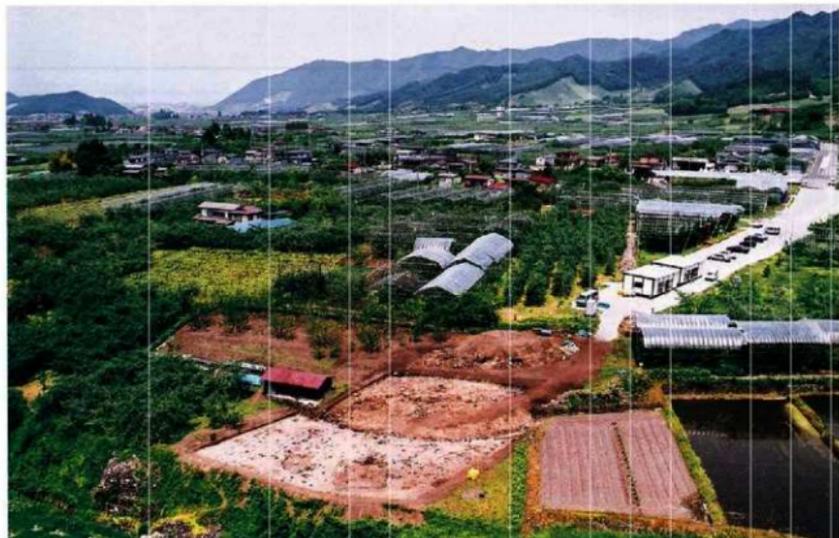
なか じ ぞう  
中 地 蔵 遺 跡

発 掘 調 査 報 告 書

平成 12 年 3 月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター





遺跡遠景(南から)



竪穴住居跡精査状況(東から)



## 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、中地藏遺跡の調査成果をまとめたものです。

中地藏遺跡は、松尾芭蕉の「奥の細道」で有名な立石寺山寺のある山形市大字山寺に位置し、周囲は果樹地帯で、さくらんぼの季節になると、遠方からの観光客でにぎわいます。

この度広域営農団地農道整備事業(村山東部二期地区)に伴い、工事に先立って中地藏遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、縄文時代の遺物や、平安時代・近世の集落跡が検出されました。平安時代の遺構では、3棟の竪穴住居跡、土坑や集落を区画する溝跡などが検出されました。遺物では、大量の土器が竪穴住居跡から出土し、また、墨書の土師器坏が出土するなど、山寺付近では不明であった平安時代の集落の様相に一考を提供する材料となりました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育ててきた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成12年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
理事長 木場清耕

## 例 言

1 本書は、広域営農団地農道整備事業(村山東部二期地区)に係る「中地藏遺跡」の発掘調査報告書である。

2 調査は、山形平野土地改良事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3 調査要項は下記の通りである。

遺 跡 名	中地藏遺跡
所 在 地	山形県山形市大字山寺字赤石1012
調 査 主 体	財団法人山形県埋蔵文化財センター
受 託 期 間	平成11年4月1日～平成12年3月31日
現 地 調 査	平成11年4月19日～平成11年6月11日
調 査 担 当 者	調査第一課長 野尻 侃 調査研究員 菅原 哲文(調査主任) 調 査 員 大村 和弘

4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形平野土地改良事務所、山形市教育委員会、山形県教育庁文化財課、東南村山教育事務所、山寺公民館等関係機関にご協力いただいた。また本書の作成にあたって、塩田達也(東北歴史博物館)、柳澤和明・吾妻俊典(宮城県多賀城跡調査研究所)の諸氏から資料閲覧の便宜及びご教示を賜った。ここに記して感謝申し上げます。

5 本書の作成・執筆は、菅原哲文、大村和弘が担当した。編集は須賀井新人、多田和弘、大村和弘が担当し、全体については、野尻 侃が監修した。

6 委託業務は下記のとおりである。

遺構写真実測	株式会社日本テクニカルセンター
出土遺物保存処理	株式会社吉田生物研究所

7 出土遺物・調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

## 凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次の通りである。

SB…掘立柱建物跡	ST…堅穴住居跡	SK…土坑
SD…溝跡	SX…性格不明遺構	SP…ピット・小穴
EP…遺構内ピット	EL…カマド	
RP…登録土器・土製品	RQ…登録石器・石製品	RM…登録金属製品
P…土器	S…石	

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。

3 報告書執筆基準は下記の通りである。

- (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は、 $N-44^{\circ}14'-E$ を測る。
- (3) 遺構実測図は1/30・1/40・1/60・1/150の縮図で採録し、各々スケールを付した。  
なお、実測図中の砂目は焼土を、網点は石を、●は遺物の出土地点を表す。
- (4) 遺物実測図・拓影図は、原則的に1/2、1/3で採録し、各々スケールを付した。
- (5) 土器観察表中の( )で示した計測値は、図上復元による推定値、石器・石製品観察表中の( )で示した計測値は残存値である。出土地点欄の層位では「F」は遺構覆土内出土、「Y」は遺構底面出土を各示し、ローマ数字「I～III」等は遺構を覆う土層(基本層序)を表している。また、「X-0」は出土地点・層位が共に不明であることを示す。
- (6) 遺物図版は、1/2、1/3の縮尺で採録した。
- (7) 遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版ともに共通したものである。遺構挿入図中に図示している遺物も同様である。
- (8) 遺構覆土ならびに遺物観察表の色調の記載については、1998年度農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に拠った。

# 目次

I 調査の経緯	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の立地と環境	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
3 遺跡の層序	5
III 平安時代の遺構と遺物	6
1 遺構の分布	6
2 竪穴住居跡	6
3 土坑・ピット	23
4 溝跡	25
5 性格不明遺構	25
IV 近世の遺構と遺物	31
1 遺構の分布	31
2 掘立柱建物跡	31
3 溝状遺構(烟跡)	31
4 土坑	31
V 縄文時代の遺物	36
VI 調査のまとめ	44
報告書抄録	51

## 表

表1 平安時代土器観察表(1)	34
表2 平安時代土器観察表(2)	35
表3 石製品・金属製品観察表	35
表4 縄文土器観察表(1)	42
表5 縄文土器観察表(2)	43
表6 石器・石製品観察表	43
表7 土器分類表	49
表8 ST1出土土器破片集計表	50

## 挿 図

第1図 遺跡位置図 .....	3	第18図 SK7・8・10・20・22・23・	26・90 .....	26
第2図 遺跡概要図 .....	4	第19図 SK27・28・48・61・62・105・	SX47・SP24・25・89 .....	27
第3図 調査区断面図 .....	5	第20図 SX19・SD38 .....		28
第4図 遺構配置図 .....	7	第21図 SK出土遺物 .....		29
第5図 ST1・EK94 .....	8	第22図 SK・SB29・グリッド	出土遺物 .....	30
第6図 ST1出土遺物分布図 .....	9	第23図 SB29・SD11~17 .....		32
第7図 ST1EL54 .....	10	第24図 SD49~53・72・74・84~88・	SK5・6 .....	33
第8図 ST1F1・F出土遺物(1)...	12	第25図 縄文土器 .....		39
第9図 ST1F1・F出土遺物(2)...	13	第26図 縄文土器・石器 .....		40
第10図 ST1F2出土遺物 .....	14	第27図 石器・石製品 .....		41
第11図 ST1F2・Y出土遺物 .....	15	第28図 土器分類図(1) .....		47
第12図 ST1EL54出土遺物 .....	16	第29図 土器分類図(2) .....		48
第13図 ST1EL54・EK93・94・		第30図 ST1出土坯類土器の法量分布		49
ED92・EP出土遺物 .....	17			
第14図 ST2・EL55 .....	19			
第15図 ST3・SK4・9 .....	20			
第16図 ST2出土遺物 .....	21			
第17図 ST2・3出土遺物 .....	22			

## 図 版

- 巻頭図版 遺跡遠景・竪穴住居跡精査状況
- 図版1 調査区全景他
- 図版2 調査区全景・1区全景
- 図版3 ST1 竪穴住居跡他
- 図版4 ST2 竪穴住居跡他
- 図版5 ST3 竪穴住居跡・土坑他(9)
- 図版6 土坑・ピット他
- 図版7 性格不明遺構・溝跡・掘立柱建物跡
- 図版8 ST1F1・F出土遺物(1)
- 図版9 ST1F1・F出土遺物(2)
- 図版10 ST1F1・F2・F出土遺物
- 図版11 ST1F2・Y・EL54出土遺物
- 図版12 ST1Y・EL54出土遺物
- 図版13 ST1EL54・EK94出土遺物
- 図版14 ST1EL54・EK93・ED92  
出土遺物
- 図版15 ST1・EP107・108・ST2  
出土遺物
- 図版16 ST2・SX57・SK4出土遺物
- 図版17 ST3・SX57・SK出土遺物
- 図版18 SK・グリッド出土遺物
- 図版19 グリッド出土遺物・石製品・  
金属製品
- 図版20 縄文土器
- 図版21 縄文土器・石器・石製品
- 図版22 石器

## I 調査の経緯

### 1 調査に至る経過

中地蔵遺跡の発掘調査は、広域営農団地農道整備事業(村山東部二期地区)に伴い実施された。当事業については、平成元年度に計画が採択になり、平成10年度から用地買収が進められ、平成13年度に完了する予定である。農道の路線は、山寺街道の中地蔵付近から大森山の東を通り、下東山・上東山を経由し国道286号線笹谷街道に至るルートとなる。

事業が開始されるのに伴い、県教育庁文化財課は、平成10年12月21日に中地蔵遺跡の事業計画地内の遺跡詳細分布調査を実施し、平安時代の遺構・遺物や、縄文土器等の遺物を確認した。これより、当該事業の建設工事に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて、県教育委員会と山形平野土地改良事務所による協議を行い、財団法人山形県埋蔵文化財センターが、事業実施区域にかかる600㎡について発掘調査を行い、記録保存を行うことになった。

発掘調査に至るまでの協議等は以下の通りである。

- ◆山形平野土地改良事務所長より県埋蔵文化財センター理事長あてに、「村山東部二期地区 広域営農団地農道整備事業の実施にともなう地区内の埋蔵文化財発掘調査」の依頼(H11/3/1)
- ◆県埋蔵文化財センター理事長より山形平野土地改良事務所長あてに、発掘調査を実施すること及び経費見積りの回答(H11/3/12)
- ◆山形県知事と県埋蔵文化財センターとで「埋蔵物発掘調査業務の委託契約」を締結(H11/4/1)

### 2 調査の方法と経過

現地調査は平成11年4月19日から6月11日までの実質36日間で実施した。調査面積は、600㎡である。調査区は、南側の平坦な段丘面を1区、北側の段丘斜面部分2区とした。グリッドの設定については、農道のセンター杭、No36(国土座標値X=-187695.762, Y=-36874.343)とNo39(国土座標値X=-187652.699, Y=-36832.563)を結んだラインを軸とし、No36からNo39へ15.3m進み、かつ北西方向へ90度曲がって15.0m進んだ点を原点とした(A0)。そして、原点から基準軸に平行で南西から北東へ延びる軸をX軸、それに直行する軸をY軸として、5mごとにX軸は原点からアルファベット順に、Y軸はアラビア数字で0から番号をふった。グリッド大きさは5m方眼で、各グリッドの名称は西隣の杭の名称を用いた。グリッドのX軸は、N-44°14'-Eを測る。

調査の経過であるが、4月19日に調査事務所を開設し、機材の搬入を行い、当日に鋤入れ式を開催した。4月20日から4月23日にかけて重機を用いた表土除去を行った後、ジョレン等の道具により面整理を行い、遺構の検出を行った。4月30日から遺構の精査を開始し、並行して写真撮影・記録作業を行った。6月2日に空中写真撮影を行い、調査説明会を6月8日に開催した。調査は6月11日をもって終了した。

## II 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境

中地藏遺跡は、山形県山形市大字山寺に所在する。山寺は、山形市の北東部に位置する。立地は、紅葉川と馬形川、2つの合流する立谷川、それぞれの河岸段丘上と、立谷川扇状地・扇頭部が主となる。東に奥羽山脈・面白山、西に大森山を望み、東の奥羽山脈脊梁で宮城県仙台市、北西は天童市と接する。

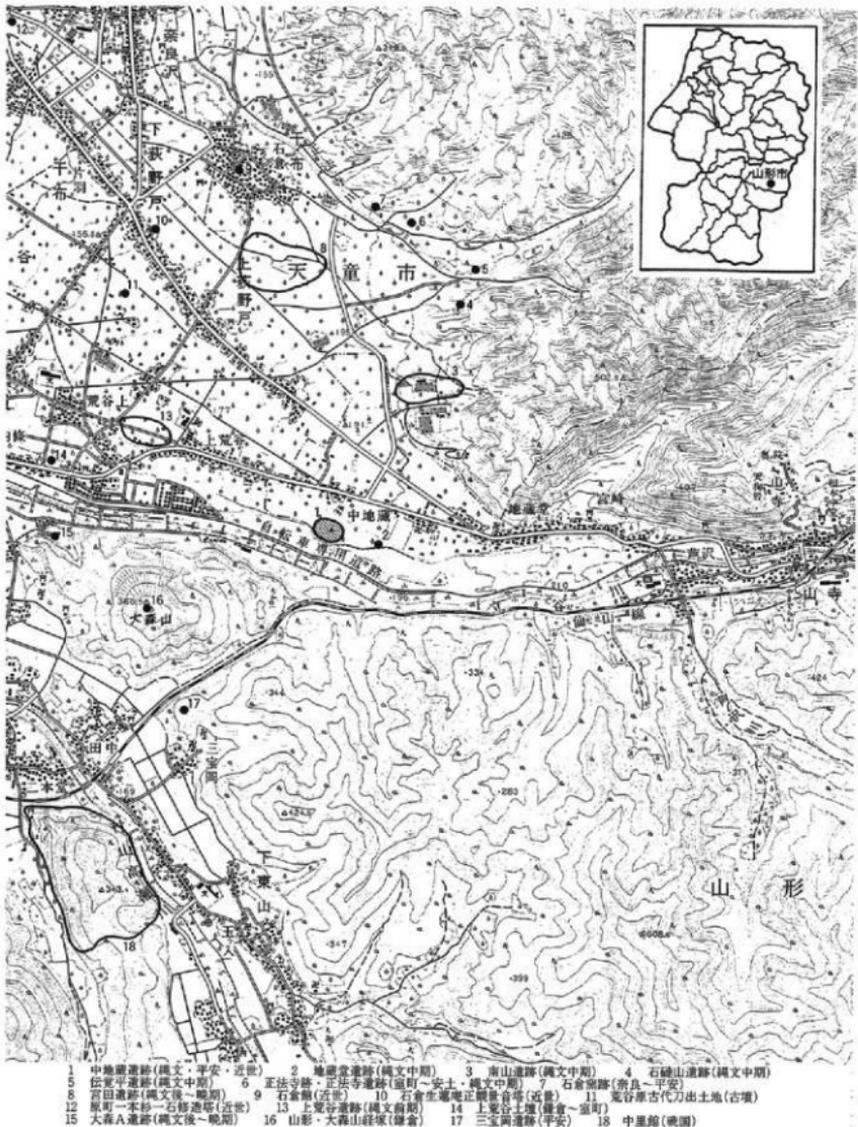
本遺跡は、南側近辺を流れる立谷川の河岸段丘上に位置する。標高は190～193mを測り、地形は、北東から南西に向けて傾斜する。本遺跡周囲の大森山と立谷川を中心に、山地と河川の接点が多い立地は、太古より狩猟採取等に適していたと考えられる。現在、遺跡周辺は、山形盆地等の温暖な内陸性気候を利用し、稲作・果樹栽培を行っている。

### 2 歴史的環境

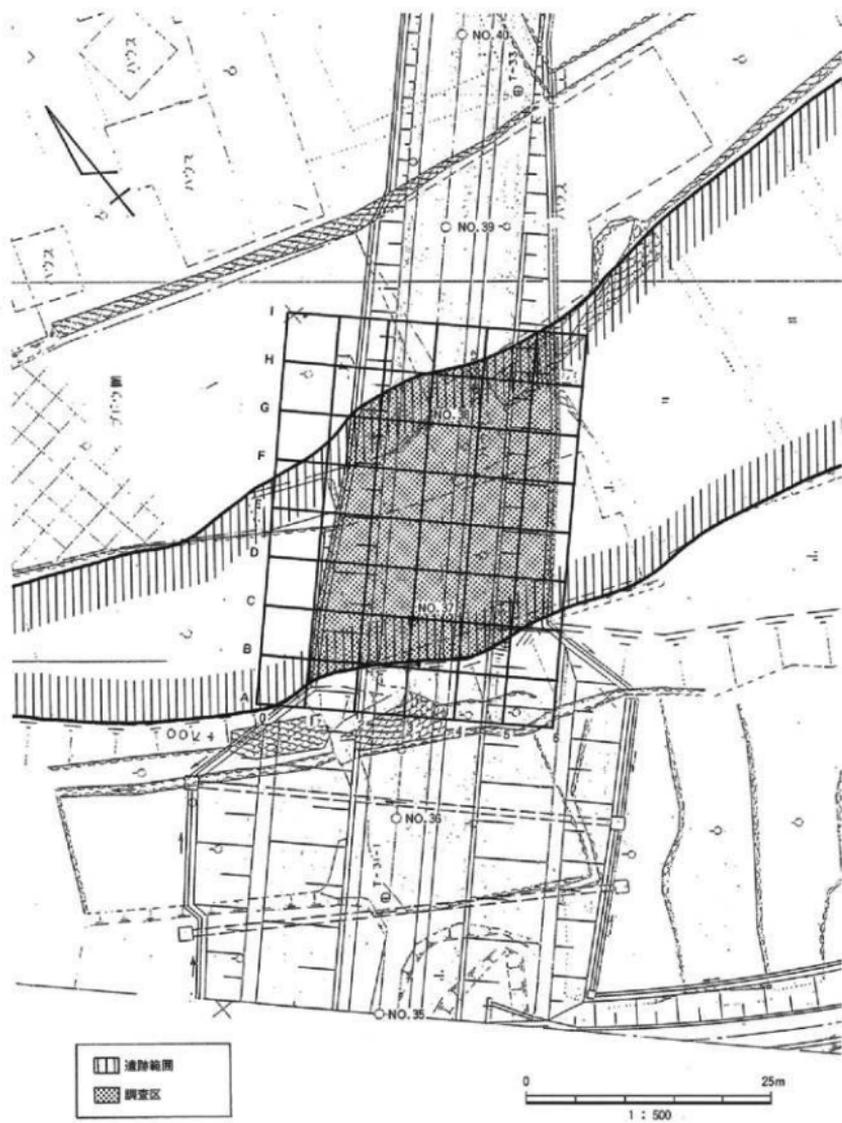
本遺跡周辺には、縄文時代前期の上荒谷遺跡、中期の地藏堂遺跡・南山遺跡、後～晩期の宮田遺跡・大森A遺跡など、縄文時代の遺跡が多数点在する。時代も広範囲に渡り、中でも縄文時代中期の遺跡が多い。本遺跡からも縄文時代の遺物が出土しており、関連性が伺える。しかし、弥生時代・古墳時代の遺跡は認められず、奈良・平安時代の遺跡も石倉窯跡と三宝岡遺跡等、確認例も僅かである。ほとんどの弥生・古墳・奈良・平安時代の遺跡は、立谷川扇状地・扇頭部に位置し、本遺跡より北西約4kmの長岡・清池地区等に古墳・奈良・平安時代の遺跡が多く確認できる。その為、立谷川扇状地・扇頭部となる本遺跡周辺地域の縄文時代以降の経緯は、不明点が多いのが現状である。

中地藏遺跡の所在する山寺は、松尾芭蕉の句で知られる立石寺の門前集落として山寺村の銘で形成された。立石寺は、最上三十三観音第二番札所となっている。元来、風食により奇怪な形状を呈する凝灰岩の山容を持つ山寺は、古くから山岳信仰の対象となっていた。それを天台宗・近江延暦寺三代座主慈覚大師円仁が開山し、承和末年、阿所川院を本坊、寺号を常願寺として一山体制を整備、貞観2年、立石寺と改めた。五代執権北条時頼の命で、一時、天台宗から禅宗へ改宗したが、衆徒が従わず、旧に復した。度々、戦火に会うが、その度に再興し現在に至る。昭和36年に立石寺中堂(根本中堂)の解体修理の際、調査が行われた。中堂は、過去5回の建て替え跡を確認し、基壇中からは、平安期の赤焼土器や古銭・和釘等が出土した。

山寺村は、江戸時代には立石寺を尊崇する最上領であり、後の元和8年・山形藩領、寛文8年・幕府領(漆山陣屋所管)、天保13年・山形藩領、弘化2年・上野館林藩領と領主が変動する。しかし、立石寺領は独自の体制をとっており、除外される。明治9年、旧山形県に所属、その後、山寺村と荒谷村が合併し、山寺村大字山寺と山寺村大字荒谷が成立する。昭和31年に大字山寺は山形市、大字荒谷は天童市の大字となる。そして昭和43～45年の土地改良事業を経て、現在の山寺を形成する。本遺跡の冠銘となっている中地藏の地名は、昭和21年頃、山寺村の間点に位置する地区を、その地区にある「延命地藏」から銘をとり、「中地藏」と命名される。



第1図 遺跡位置図(国土地理院発行2万5千分の1地形図「山形」を使用)



第2図 遺跡概要図

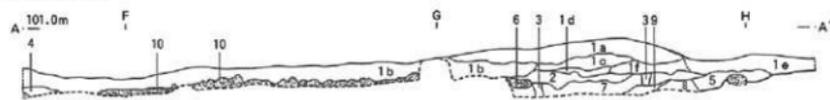
## 3 遺跡の層序

遺跡の基本層序であるが、調査区西壁を基準として、I～III層が確認される(第3図)。I層は黒色砂質シルトの表土で、厚さ10～40cmである。調査区の全面に分布する。II層は黒褐色砂質シルトで、厚さ5～15cmである。1区に分布する。I層とIII層の漸移層であり、1区内で部分的に認められない箇所もある。III層は暗褐色砂質シルトで、1区に分布する。西側では、III層が無く直接礫層になる部分がある。III層の上面で平安時代の遺構が検出される。近世の遺構も、より上層から掘り込んでいる可能性があるが、同じくIII層上面で検出される。

次に1区東壁の層序について述べたい。南半部分でI層の直下に地山の礫層が現れるが、北半部分では、耕作の影響や堆積層数が多いため、西壁と比べて様相は複雑になっている。1a～1e層は西壁I層に対応し、2層は表土との漸移層でII層に対応する。7層はIII層に対応する。8・9層は黒褐色砂質シルトで、縄文時代中期の遺物を含む。遺物の出土はさほど多くないが、遺物が出土する付近には、炭化物ブロックが少量部分的に入る。東壁断面図に示していないが、9層の下にも、III層と類似した層が広がる。これらの層の下は、最終的には礫層になる。

2区では、表土のI層の下は直接礫層になる。礫の大きさは、直径5cm程から人頭大であり、河川堆積物と考えられる。

調査区東壁断面図



調査区東壁	層	土質	特徴
1a	10Y R2/1	黒シルト	根による攪乱をうける
1b	10Y R2/1	シルト	小礫を含む、耕作土
1c	10Y R2/1	シルト	白色岩粒を少量、黒砂質シルトを微量、水田畦畔
1d	10Y R2/2	黒褐シルト	暗褐シルトを少量含む
1e	10Y R2/1	黒砂質シルト	白色岩粒・小礫を少量含む、水田耕作土
1f	10Y R2/2	黒褐シルト	白色岩粒・黒砂質シルトを少量含む、耕作による攪乱あり
2	10Y R2/3	黒褐シルト	白色岩粒を微量、黒褐シルト、黒砂質シルトを少量含む
3	10Y R3/3	暗褐砂質シルト	黒シルトを多く含む
4	10Y R2/1	黒シルト	暗褐砂質シルトを微量含む、S K104礫土
5	10Y R2/1	黒シルト	白色岩粒、黒砂質シルトを少量含む、S D38礫土
6	10Y R4/4	砂	礫を多量に含む
7	10Y R4/4	砂質シルト	黒褐シルトを含む、平安時代の遺構検出面
8	10Y R2/2	黒褐砂質シルト	白色岩粒、黒褐シルトを少量含む、耕作による攪乱あり
9	10Y R3/2	黒砂質シルト	炭化物ブロックを含む
10	10Y R4/4	礫	風化礫層、黒褐シルトを少量含む

調査区西壁断面図



調査区西壁	層	土質	特徴
I	10Y R2/1	黒砂質シルト	黒・砂・暗褐砂質シルトを少量含む、表土
II	10Y R2/3	黒褐砂質シルト	砂を少量、暗褐砂質シルトを多量含む
III	10Y R3/3	暗褐砂質シルト	黒・黒褐シルトを微量含む

第3図 調査区断面図

### Ⅲ 平安時代の遺構と遺物

#### 1 遺構の分布

平安時代の遺構の分布であるが、河岸段丘の段丘面にあたる1区に密集している(第4図)。竪穴住居跡は、段丘縁辺に沿って、3棟検出されている。竪穴住居跡の主軸方向もほぼ同方向である。ST3は調査区外に半分出る形になるが、調査区のすぐ南は段丘崖になっている。元々平安時代の遺構が分布している段丘面は、現在の範囲よりも、当時はやや南側に張り出していたと思われ、その後近年まで立谷川の浸食や自然の崩落で段丘面の範囲が狭まったと考えられる。土坑は竪穴住居跡より北側に多く分布する。遺構登録したもので、計31基検出された。段丘平坦面と調査区中央の斜面の境界には、溝跡(SD38)が東西に巡る。溝は調査区外に延びる。1区西側の礫層周辺及び東側は、遺構の分布がやや希薄である。

2区では、北から南に向かって緩やかに傾斜しており、表土の直下が礫層であるため、遺構の分布が希薄である。SK95~98などは攪乱の可能性が高い。また、2区の東から西にかけて、表土に類似した黒色土層が堆積した浅い溝状の落ち込みが見られるが、自然地形的なものと考えられる。

#### 2 竪穴住居跡

##### ST1(第5図)

位置・重複：C-3~D-4グリッドに位置する。住居跡の北辺でSX19に、北西隅でSK4に、カマドの北側でSK18に切られる。

規模・平面形：東西約6.0m、南北約5.8mの隅丸方形である。

主軸方向：N-2°-Eを測る。

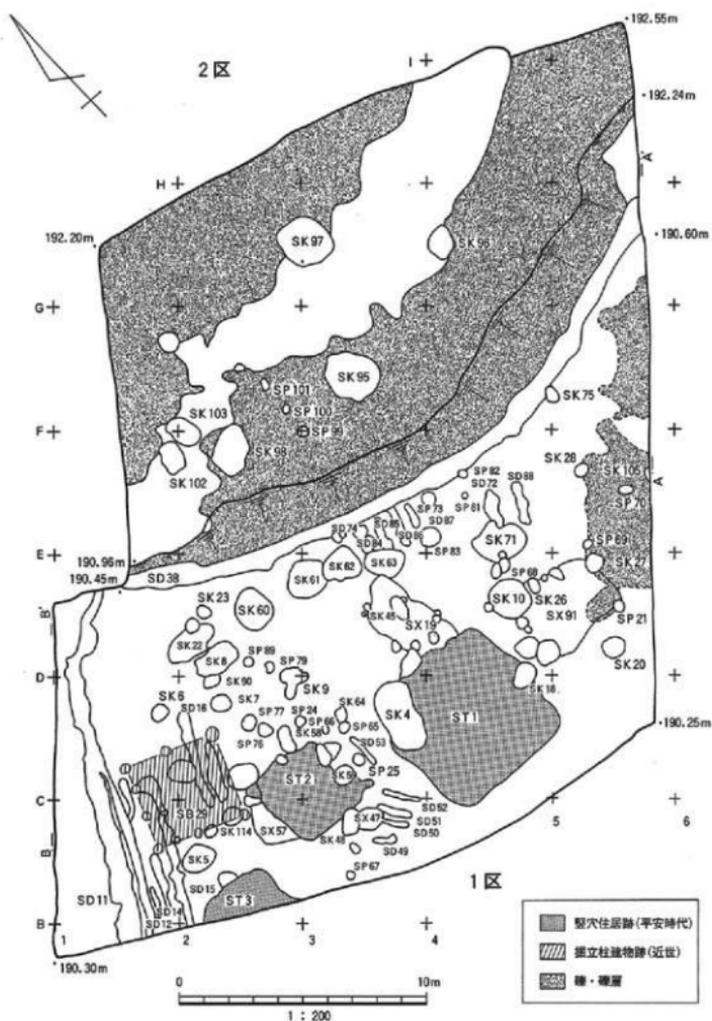
覆土：3層に分かれる。覆土1・2層からは多量の須恵器・土師器等の遺物が出土し、人為的な廃棄によって形成されたと考えられる。覆土3層は周囲からの流れ込みと考えられる自然堆積層である。4は貼床で、住居跡の床面全体に認められる。褐砂質シルトブロックを多く含む。壁・床面：床面は平坦であるが、南側に少し傾斜する。床面に、長さ110cm、幅80cmの焼土が1カ所、直径20~30cmの焼土が3カ所認められる。

柱穴：柱穴は、EP106~109の4基である。大きさは直径26~50cm、深さは28~50cmである。

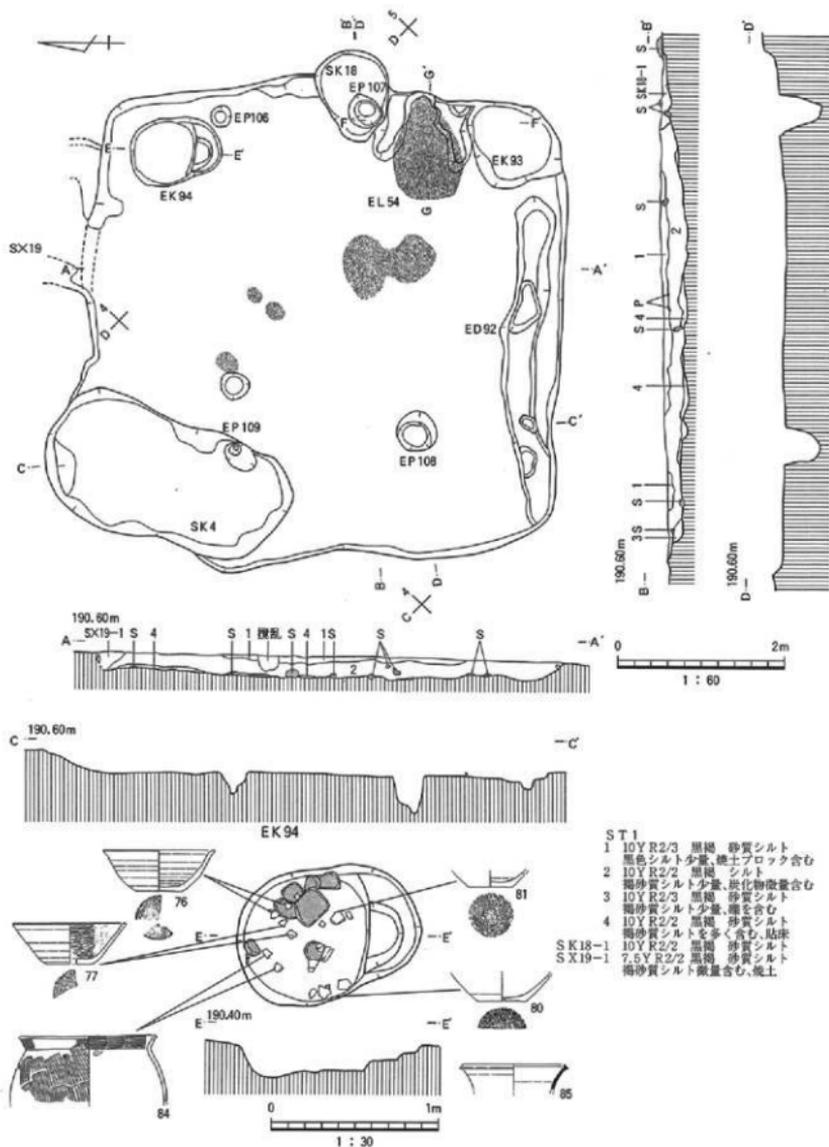
柱間隔は、主軸方向が約330~390cm、主軸と直行する方向で約180~210cmである。

カマド(EL54)：住居跡の東辺やや南よりに位置する。本体の長さ130cm、幅118cmである。遺存状態はやや不良で、廃棄後に壊されたと考えられる。煙道は確認されず、上部が削平された可能性がある。袖は、にぶい褐色の砂質シルトを貼っている。カマド覆土中には、多くの円礫や角礫が含まれ、遺物の出土も多い。角礫はカマドの構築材と考えられる。

カマド及び隣接するEK93の遺物の出土地点を第7図に示した。67はカマド内部に破片が散乱している。カマドで使用された可能性が高い。71はカマドやEK93から破片が出土している。82・83はEK93の底面から出土し、遺棄された可能性が高い。EK93内部からは、この他78・



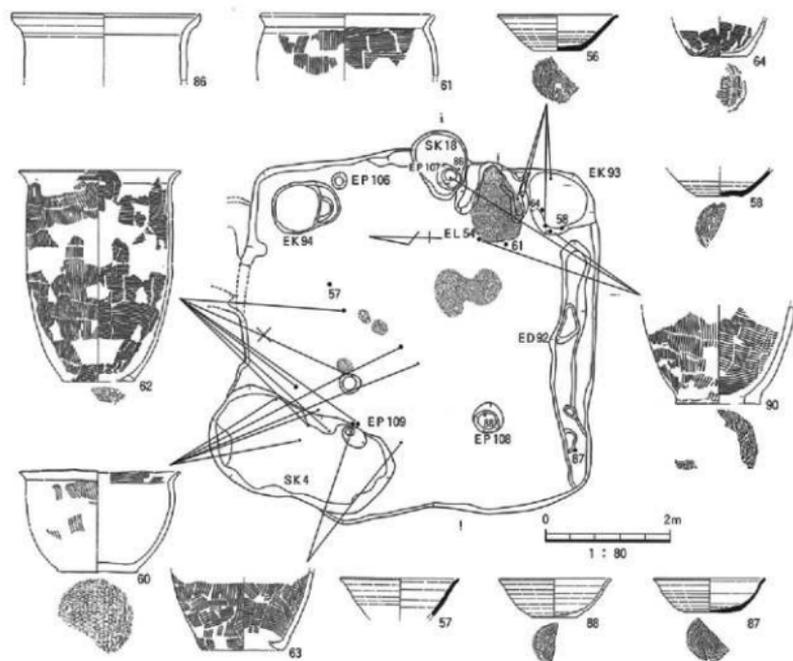
第4図 遺構配置図



第5図 ST1・EK94

79などの坏や高台付坏も出土している。

その他の施設：貯蔵穴と考えられる土坑が2基確認された。EK94は、楕円形で、住居跡の北東隅に位置し、長軸110cm、短軸80cm、深さ20cmである。覆土中から須恵器・土師器等の遺物や礫が出土し、礫には被熱した物も認められる(第5図)。遺物は廃棄されたものである。EK93は、カマド南隣に位置し、不整楕円形で、大きさは、長軸120cm、短軸100cm、深さ15cmである。覆土中から、カマドの袖石や、須恵器・土師器等の遺物が出土している(第7図)。この他、住居跡の南辺に沿って周溝(SD92)が確認された。幅は30~45cm程、深さは3~18cm程である。遺物の出土状況：床面および住居内施設から出土した遺物の分布を第6図に示した。図中の大きな黒点は、床面の出土地点を、小さな黒点は、覆土中の出土地点を示す。88は住居跡の柱穴EP108覆土中から出土した。柱の抜き取り後に廃棄されたと考えられる。60・62・63は、住居跡の北西側から出土し、破片が接合している。また、EK93内底面からも、56・58・64などの遺物が出土している。完形で出土したものはない。90・61はカマド周囲から出土している。出土遺物：ST1からは、多量の土器が出土した。第8図1~19、第9図20~37は、覆土1層、覆土上層から出土した遺物である。第8図1~7は須恵器坏である。底部は全て回転糸切りで



第6図 ST1出土遺物分布図



ある。8～10は赤焼土器坏である。10は底部が擬似高台になる。11は土師器坏である。外面には横方向にケズリが、内面にはミガキが施される。底部には縄物圧痕がある。12・13は土師器坏(内面黒色処理)である。底部は回転糸切りで、内面にはミガキが施される。12の底部付近には、部分的にケズリが認められる。14は須恵器の高台付坏である。15・16は、赤焼土器高台付坏である。16は高い高台が付く。18・19は土師器高台付坏(内面黒色処理)である。18は底部に菊花状圧痕が施される。17も高台坏で、底部に菊花状圧痕が施される。第9図20・21・22は須恵器壺である。20の内面、21の外面にはカキメが施される。22の外面にはケズリが、内面にはヘラナデが施される。23は土師器壺と考えられる。24～35は土師器甕である。29～33・35の底面には縄物圧痕があり、34には木葉痕が認められる。35は、底部が外側に張り出す。36は把手で、甕に付くものと考えられる。37は砥石で、途中で破損している。使用面は4面認められる。

第10図38～51、第11図52～55は、覆土2層出土の遺物である。38～41は須恵器坏で、底部は回転糸切りである。42は赤焼土器坏である。43は土師器坏である。外面には横方向のケズリが、内面にはミガキが施され、底面には縄物圧痕がある。44は土師器高台付坏である。ロクロ成形で、内面にはミガキが施され、底部には台状の高台が付く。45・46は須恵器壺である。46の底部は丸底で、高台がつく。47は須恵器甕の体部破片である。外面には平行タタキ目が、内面には同心円状アテ痕がつく。48～54は土師器甕である。底面には縄物圧痕がある。48は小型の土師器甕で、内外面にハケメを施した後、口縁部外面にナデ調整を施す。49も同様である。50は胴部の膨らみが小さい小型の甕である。51は大型の長胴甕である。55は鉄製品の刀子で、先端部が残る。

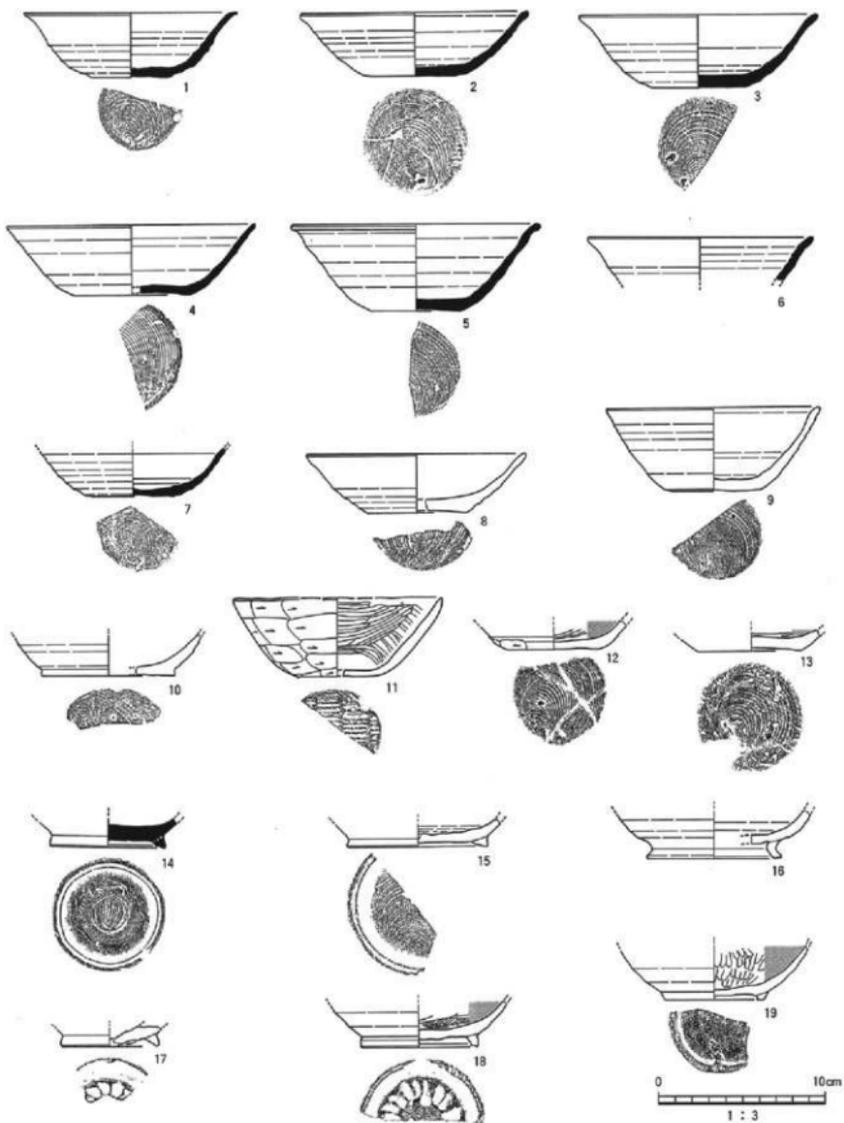
第11図56～64は床面出土の遺物である。56～58は須恵器坏である。底部は回転糸切りである。59は須恵器壺である。60～64は土師器甕である。60は口径より器高が小さい小型の甕である。61は体部が丸く膨らむ小型の甕である。62は大型で長胴の甕である。

第12図65～74、第13図1はE L 54出土の遺物である。65は赤焼土器の高台付坏である。66は須恵器壺の底部で、高台が付く。67～73は土師器甕である。底部は、67・71・72は縄物圧痕が付き、73は木葉痕が付く。67・68は小型の甕で、69・70・71は大型の長胴甕になる。74は須恵器甕である。外面には格子目状タタキが、内面には同心円状アテ痕がつく。75は鉄製品であるが用途は不明である。板状で、縁辺が若干湾曲する。把手の可能性も考えられる。

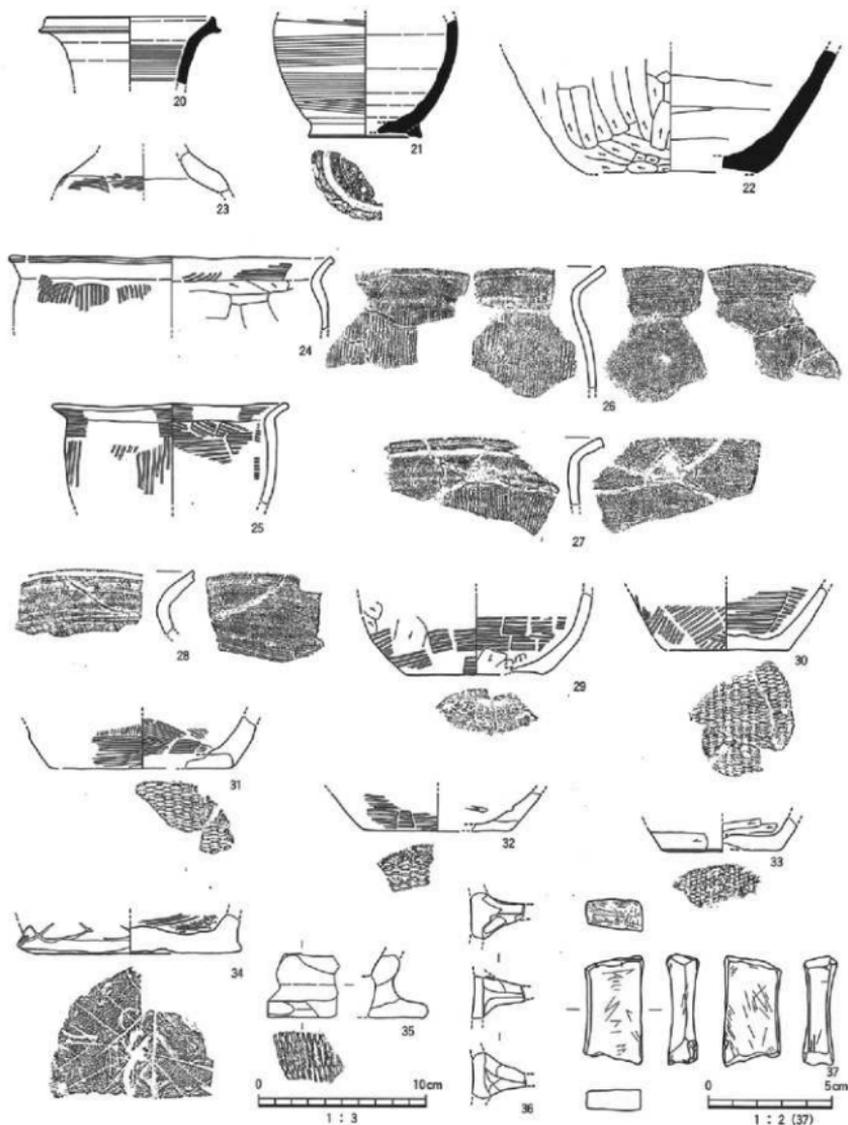
第13図78・79・82・83はカマドに隣接するE K 93から出土した遺物である。78は赤焼土器坏である。79は土師器高台付坏(内面黒色処理)である。82・83は土師器甕である。82の外面にはハケメの他にケズリがある。底面には木葉痕が認められる。83の底面には縄物圧痕がある。

第13図76・77・80・81・84・85は住居跡北隅のE K 94から出土した遺物である。76・80・81は赤焼土器坏である。77は土師器坏(内面黒色処理)である。84は小型の土師器甕である。口縁部外面はナデが、内面にはハケメが施される。85は須恵器壺の口縁部である。

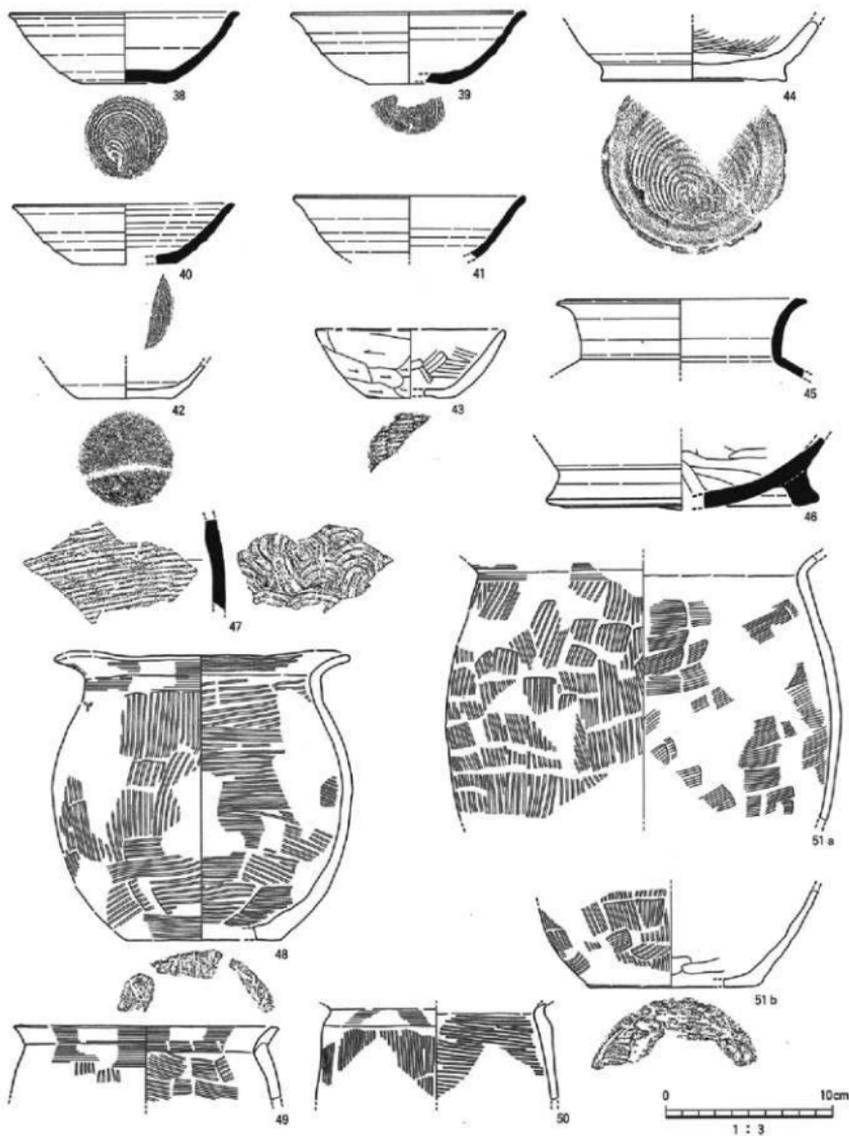
第13図87は須恵器坏で、住居跡の周溝E D 92底面から出土した。第13図86・89・90は、E P 107覆土から出土した。86は赤焼土器甕である。90は土師器甕である。底面に縄物圧痕が認められる。89は須恵器甕の体部破片である。外面には格子目状タタキ目が、内面には同心円状アテ痕が認められる。第13図88はE P 108覆土出土で、赤焼土器坏である。



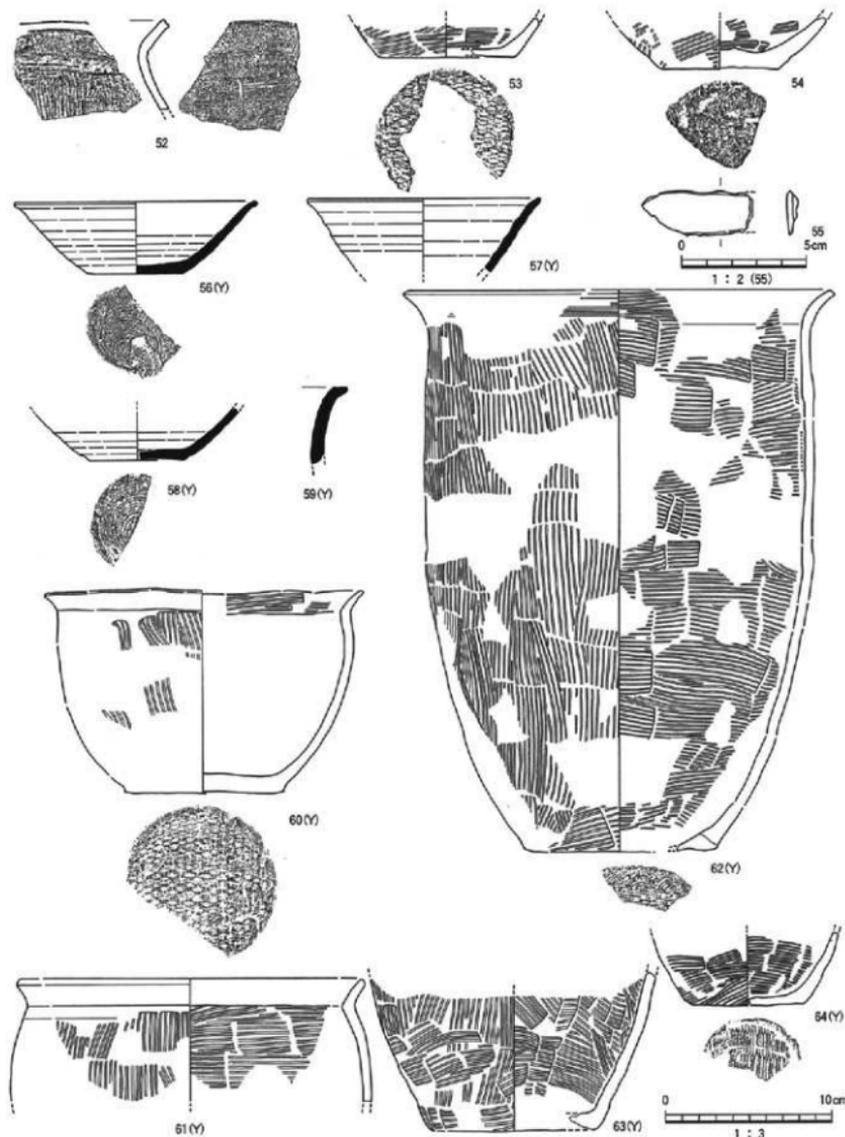
第8図 ST1F1・F出土遺物(1)



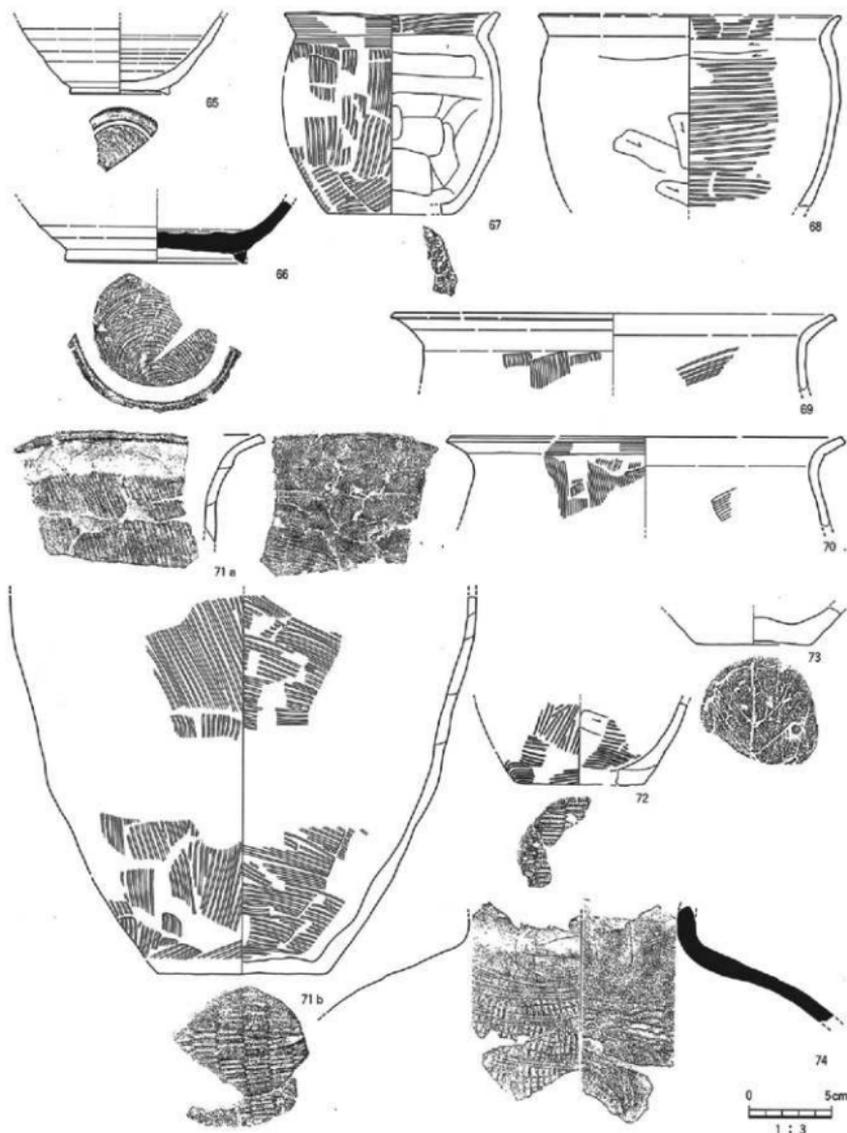
第9図 ST1F1・F出土遺物(2)



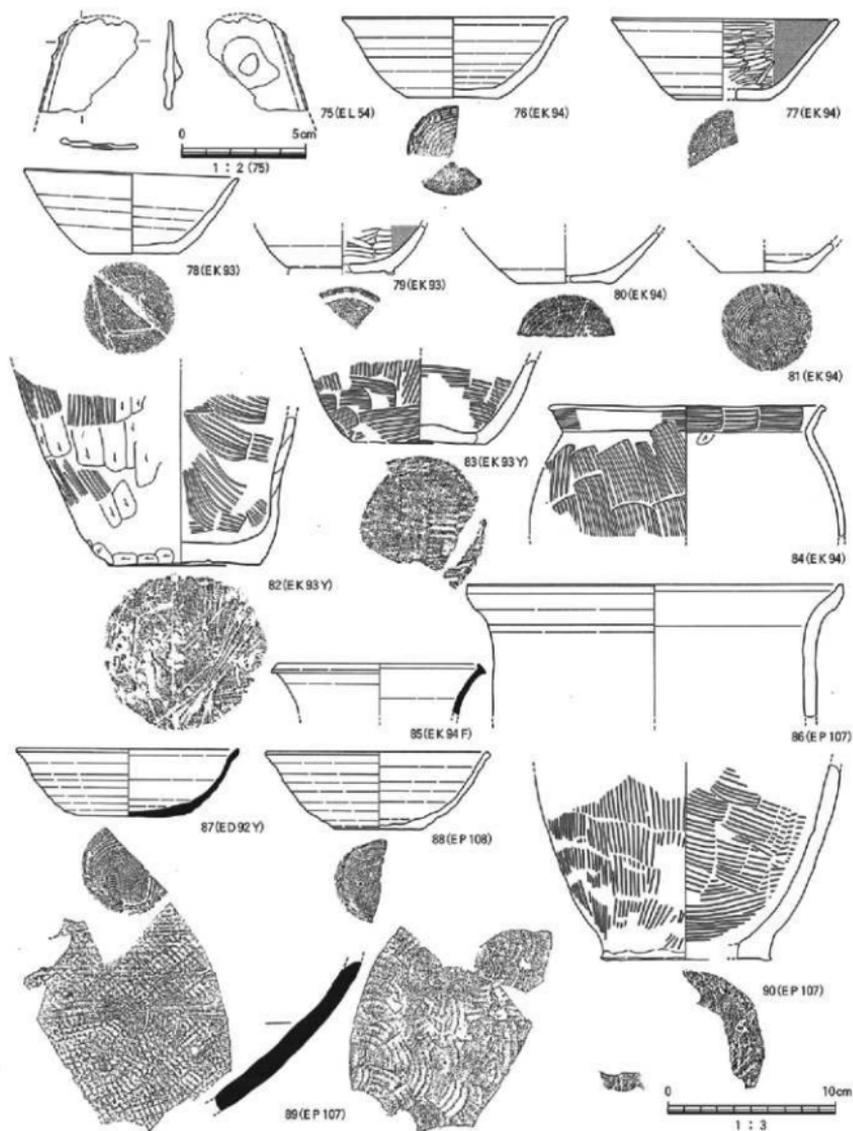
第10図 ST1F2出土遺物



第11図 ST1F2・Y出土遺物



第12図 ST1EL54出土遺物



第13図 ST 1 E L 54・E K 93・94・E D 92・E P 107・108出土遺物

ST2 (第14図)

位置・重複：B-2～C-3グリッドに位置する。SK48、SK59に切られる。SK58と重複するが、重複関係は不明である。SX57を切る。

規模・平面形：東西3.3m、南北3.5mの隅丸方形で、ややカマドの部分が外側に張り出す。主軸方向：N-2°-Eを測る。

覆土：3層に分かれる。覆土中からの遺物の出土はそれほど多くはない。4は貼床である。壁・床面：床面は平坦である。褐砂質シルトを含む黒褐色の貼床が床全体に広がる。貼床下は礫層である。壁はやや外傾しながら立ち上がる。住居跡の検出面からの深さは12～28cm程である。また、東辺の中央に、60～70cm程の広がりを持つ焼土が認められる。焼土上の床面から土師器甕(94)が出土している。

柱穴：検出されなかった。

カマド(EL55)：住居跡の南東隅に位置する。大きさは、煙道長が50cm、カマド本体の長さ130cm、幅118cmである。カマドは、袖の本体は残っていないが、両方の袖石が残存している。袖石は、長さ約30cm、幅25cm、厚さ8～15cmの板状の安山岩である。また、燃烧部の覆土中に礫が集中するが、これらはカマドの構築材の一部と考えられる。燃烧部から、土師器の甕(96・98)が出土している。

その他の施設：住居跡北東隅に階段状に張り出す部分があり、出入り口の可能性がある。また、住居跡中央部分に、扁平な河原石が認められたが、作業台として用いられていたと考えられる。

出土遺物：第16図93は須恵器坏である。底部は回転糸切りである。91は赤焼土器坏、92は赤焼土器甕である。94～98は土師器甕である。94は床面出土の小型の甕である。口縁部にナデが施される。96はカマド床面出土で、同じく小型の甕である。98はカマド覆土から出土した。95・97は住居跡覆土の出土である。95はカマド周囲の覆土から破片が出土し、接合している。甕の底面にはいずれも繩物圧痕が見られる。99・100は須恵器甕である。99の口縁部には波状文が施される。第17図100は体部上半から下半分にかけての破片で、外面には平行タタキ目が、内面には同心円状アテ裏が認められる。住居跡北側から破片が出土し接合している。

ST3 (第15図)

位置・重複：B-2グリッドに位置する。

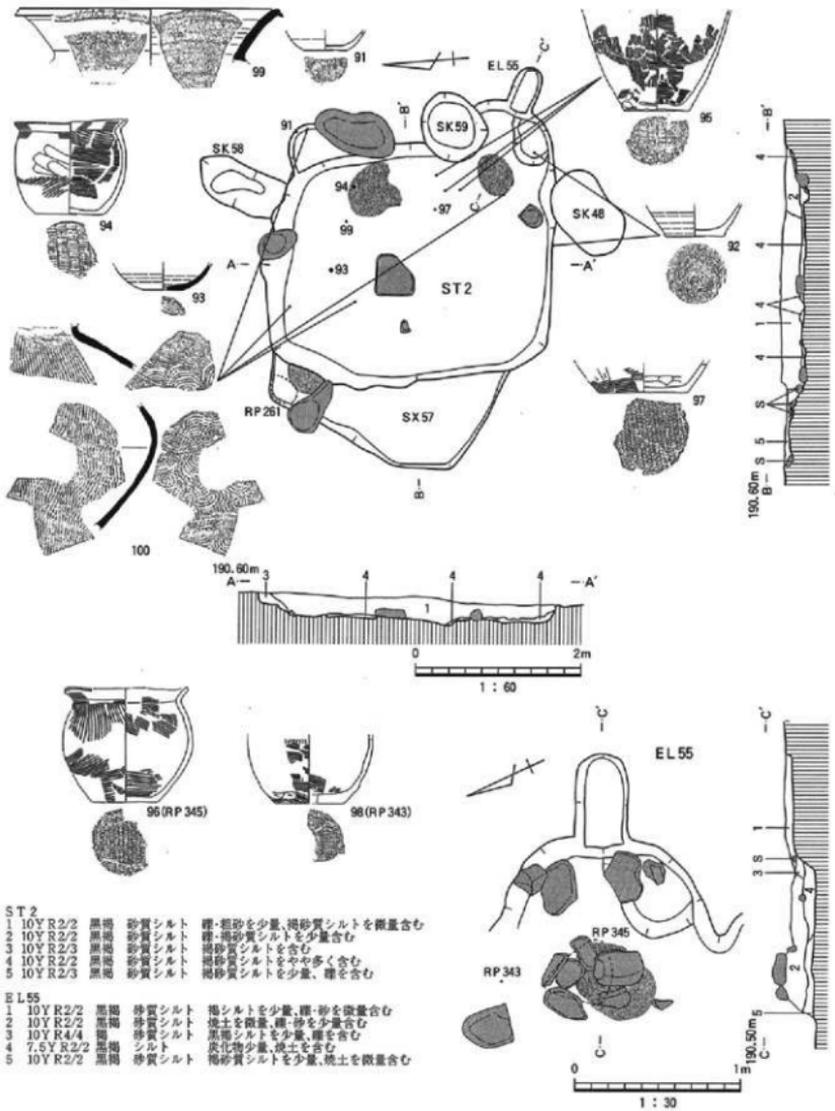
規模・平面形：規模は、検出された部分で東西3.2m、南側は調査区外で段丘崖になっており、広がり不明である。隅丸方形であると考えられる。

主軸方向：N-8°-Eを測る。

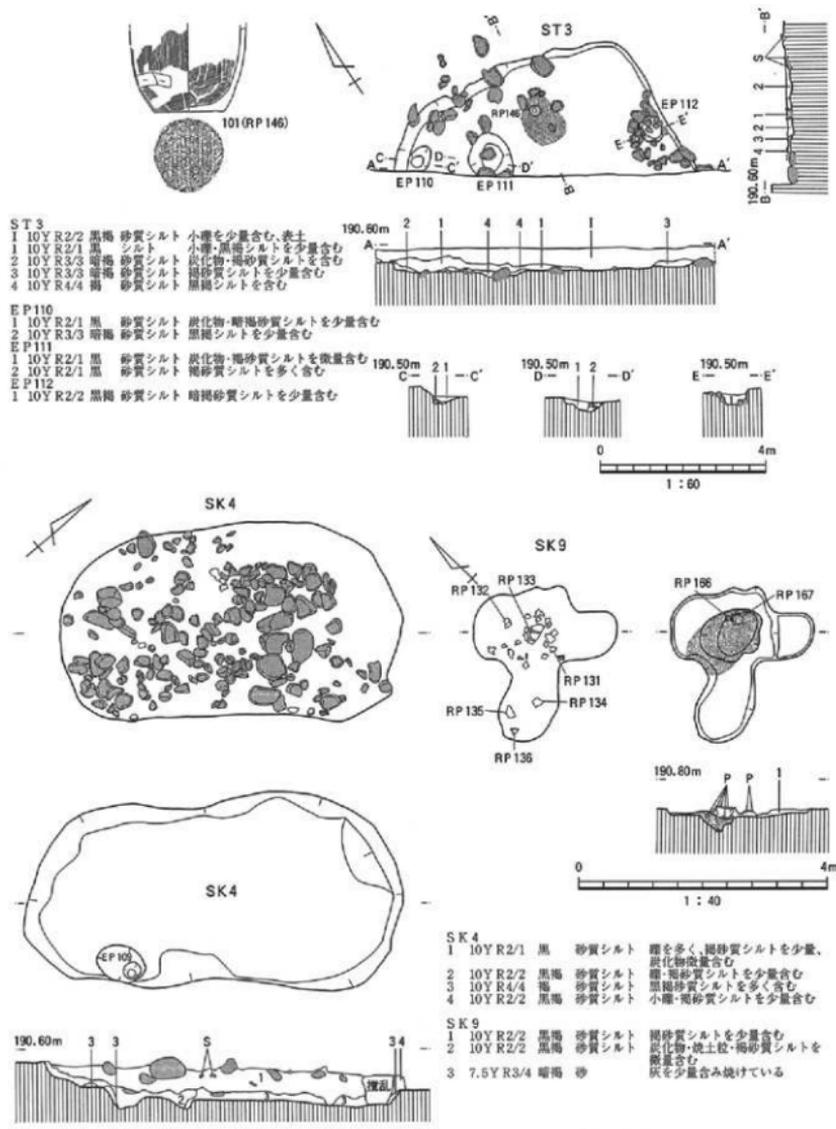
覆土：4層に分かれる。耕作時の攪乱がひどく、住居跡中央部分で覆土が無い部分がある。

壁・床面：遺存状態が悪くなく、検出面からの深さは10～18cm程である。床面は平坦であるが、所々、地山の礫層が露出している。

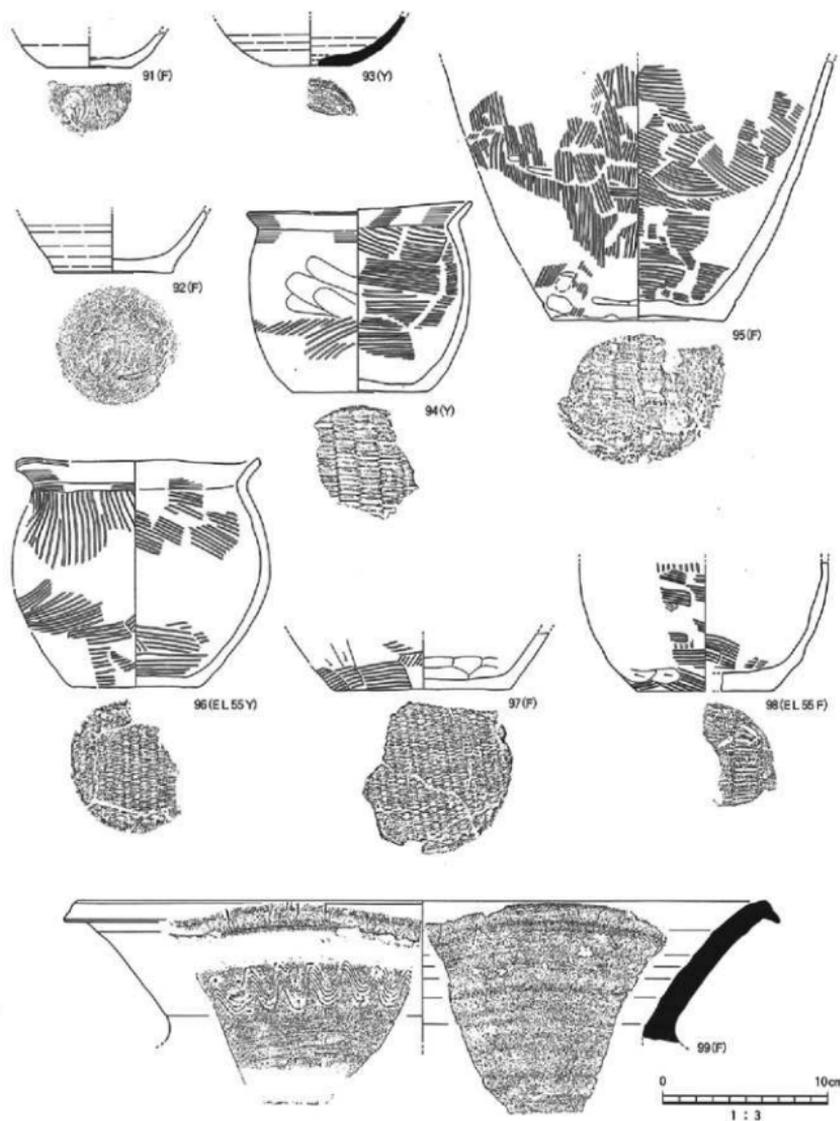
柱穴：柱穴状の落ち込みが3基検出された。EP110、EP111、EP112である。大きさは直径30～50cm程、深さは10cm前後である。浅く、この住居跡の柱穴かどうか不明である。EP112の周囲には、小さな礫を周囲に詰め込んだような形跡が認められる。



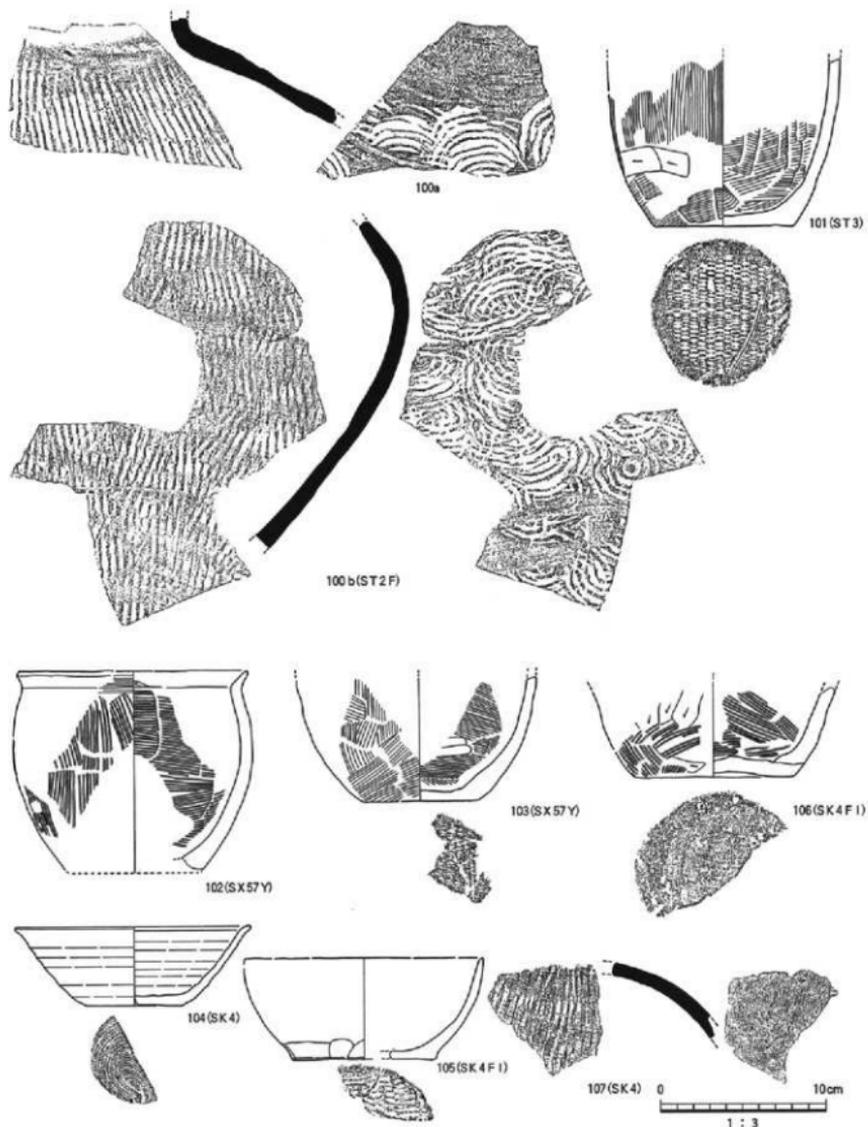
第14図 ST 2・EL 55



第15図 ST 3・SK 4・9



第16図 ST 2 出土遺物



第17図 ST 2・3 出土遺物

カマド(E L 56)：住居跡の北辺中央部分寄りに検出された。煙道、袖は確認されず、焼土の広がりのみが認められた。焼土は、長さ52cm、幅46cmの楕円形状で、土師器甕(R P 146・第17図101)がその中から直立する状態で出土した。燃焼部周囲には礫が散在するが、袖石だった可能性がある。

出土遺物：カマドから出土した土師器甕であるが(第18図101)、体部上半を欠く小型の甕である。内外面にハケメが施され、底面には編物圧痕が認められる。

### 3 土坑・ピット

SK 4(第15図) C-3グリッドに位置し、ST 1を切る。歪んだ楕円形を呈し、長軸305cm、短軸160cm、深さ33cmを測る。底面には起伏がある。覆土は3層に分かれ、人為的な堆積と考えられる。覆土1層中には、多量の円礫や角礫が廃棄されている。遺物は、覆土1層の出土が多く、土師器甕・坏等が出土している。その多くは、ST 1出土の土器と接合し、ST 1を掘り込んだ際に混入したと思われる。しかし、平安時代より新しい遺物は含まれていない。

出土遺物であるが、第17図104は赤焼土器坏である。105は土師器坏である。底部付近にナデが施され、底面に編物圧痕がある。106は土師器甕である。底面には編物圧痕が認められる。107は須恵器甕の体部上半の破片である。外面に平行タケキ目が施される。

SK 9(第15図) C・D-2グリッドに位置する。不整形を呈する。大きさは、長軸115cm、短軸72cm、深さは25cmを測る。覆土は3層に分かれる。覆土2層は、焼土や炭化物を含み、3層は焼土である。土坑の底面は焼ける。覆土中から、遺物が出土している。

出土遺物であるが、第21図108は赤焼土器坏である。109は土師器坏である。外面に横方向のケズリが、内面にミガキが施される。112、114は土師器甕である。112は口縁部が短く外反し、単位が密なハケメが施される。

SK 7(第18図) C-2グリッドに位置する。平面形は円形で、直径80cm、深さは22cmを測る。覆土は2層に分かれる。遺物の出土はない。

SK 8(第18図) D-2グリッドに位置する。平面形は不規則な楕円形である。大きさは、長軸190cm、短軸107cm、深さは12cmを測る。覆土は2層に分かれる。底面には凹凸がある。土坑中には、角礫が多量に廃棄されており、礫は、多孔質で被熱したものが多く見受けられる。カマドの袖石などに利用されたものが廃棄された可能性がある。出土遺物であるが、覆土中から須恵器甕、赤焼土器坏、土師器甕、鉄製品の釘(第21図111)が出土している。

SK 22(第18図) D-1・2グリッドに位置する。SK 8の北隣にあり、重複関係があると考えられるが、前後関係は不明である。平面形は楕円形を呈し、大きさは、長軸227cm、短軸122cm、深さ40cmを測る。覆土は2層に分かれ、自然堆積と考えられる。覆土中に礫が含まれる。遺物は赤焼土器坏、土師器甕が出土している。

SK 90(第18図) C-2グリッドに位置する。SK 8に切られる。平面形は不整形円形であると考えられる。大きさは、最も長い部分で75cm、深さは18cmを測る。壁は、柱状にやや急に立ち上がる。覆土から土師器坏が出土している(第22図123)。外面には横方向のケズリが、内面

にはナデが施される。底面には編物圧痕がある。外面に墨書があり「允」と読みとれる。また、口縁外面の一部や内面に褐色の膜状の付着物がある。口縁部の内外面は赤変しており、朱彩された可能性も考えられる。

S K 10(第18図) D-4グリッドに位置する。平面形は円形である。直径は、160cm程、深さは17cmを測る。覆土は3層に分かれる。覆土1層には、30cm程の扁平な碟を含む。覆土3層には焼土粒を含む。土坑は、比較的均一な深さであり、底面には地山の碟が露出している。また、底面の半分以上が焼けている。遺物は、覆土中から須恵器坏、土師器甕、鉄製品の釘(R M273・第21図110)が出土している。

S K 20(第18図) D-5グリッドに位置する。平面形は円形で、大きさは、直径95cm、深さ10cmを測る。地山の礫層を掘り込んで作られている。覆土は1層のみである。出土遺物であるが、赤焼土器甕(第21図120)は、体部にカキメが施される。他に赤焼土器坏が出土している。

S K 23(第18図) D-2グリッドに位置する。平面形は不整形円形である。大きさは、長軸で62cm、短軸で50cm、深さは32cmを測る。土坑として登録したが、深く落ち込む箇所があるため、柱穴の可能性がある。遺物は出土していない。

S K 26(第18図) D-4グリッドに位置する。平面形は楕円形で、大きさは長軸65cm、短軸43cm、深さ20cmを測る。覆土は2層に分かれ、自然堆積と考えられる。遺物の出土はない。

S K 27(第19図) D-5グリッドに位置する。平面形は不整形円形で、大きさは長軸82cm、短軸75cm、深さ15cmを測る。覆土は2層に分かれ、地山由来の礫を含む。遺物の出土はない。

S K 28(第19図) E-5グリッドに位置する。平面形は円形である。直径は57cm、深さ10cm程である。覆土は1層のみで、焼土や炭化物を含む。土坑自体は焼けていない。覆土中から遺物が出土している。第21図117(R P 256)は須恵器壺の底部である。118・119は土師器甕で、底面に編物圧痕がある。図示していないが、R P 257・258・260は土師器甕である。出土した土師器甕には、被熱のため焼けはじけを起こしているものがある。

S K 48(第19図) B-3グリッドに位置する。重複関係であるが、S T 2を切り、S X 47に切られる。平面形は楕円形である。大きさは、長軸108cm、短軸68cm、深さ14cmを測る。覆土は3層に分かれる。遺物の出土はない。

S K 61(第19図) D-2・3グリッドに位置する。重複関係では、S K 62に切られる。平面形は不整形円形で、大きさは長軸で185cm、深さ13cmを測る。底面は比較的平坦である。遺物では、土師器甕、内黒土師器の小片が出土しているが、摩耗している。

S K 62(第19図) D-3グリッドに位置する。重複関係では、S K 61を切る。平面形は不整形円形で長軸160cm、短軸135cm、深さ23cmを測る。覆土は2層に分かれるが、1層は攪乱を受けた部分と考えられ、2層と入り組んだ状態で堆積している。遺物は、土師器甕(第22図122)が出土している。その他、須恵器の小破片、赤焼土器坏、土師器甕の破片が出土している。

S K 105(第19図) E-5グリッドに位置する。半分が調査区外であるが、平面形は円形に近いと考えられ、長軸で74cm、深さ18cmを測る。礫層を掘り込んでおり、覆土中には礫が混じる。出土遺物であるが、第22図124(R P 255)は完形の赤焼土器坏で、底径が比較的大きい。底部

が薄く、破れている。その他、土師器甕(R P 339)、内黒土師器坏が出土している。

S P 24(第19図) C-2・3グリッドに位置する。平面形は不整形で、長軸部分の長さは45cm、深さは9cmと浅い。覆土は2層に分かれ、覆土には焼土や灰が混じる。底面はやや起伏がある。遺物は、赤焼土器坏(R P 148)、土師器甕(R P 149)、須恵器坏・甕の小破片が出土している。

S P 25(第19図) C-3グリッドに位置する。平面形は円形で、直径50cm、深さ5cmと浅い。覆土は1層のみである。遺物は土師器甕の小片(R P 147)が出土している。

S P 89(第19図) D-2グリッドに位置する。平面形は円形で、直径42cm、深さ34cmを測る。柱穴と考えられる。遺物は土師器甕の破片(R P 265)が出土している。

#### 4 溝跡

S D 38(第20図) D~G-1~5グリッドに位置する。1区北側の段丘平坦面と斜面の境界に沿って、東西方向に走る。溝は基本層のⅢ層とその下の礫層を掘り込んでいる。検出部分の全長は27mで、調査区の東西外に延びる。幅は52~102cm、深さは20~62cmを測る。場所によって溝の断面の形や堆積する覆土が異なる。東側は深さ30~40cmと浅く、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は上層が黒色シルトで、下層は黒褐色砂質シルトとなる。西側は、溝の深さは60cm程度と深く、壁は垂直に近い状態で立ち上がる。堆積層は黒色シルトを基本とし、壁面近くには、黄澄シルトブロックが混じる黒色砂質シルトが堆積する。溝の覆土は自然堆積と考えられる。出土遺物であるが、縄文時代の遺物の混入が多い。縄文時代の遺物包含層を掘り込んでいるためである。平安時代の遺物では、土師器甕の小破片が出土している。

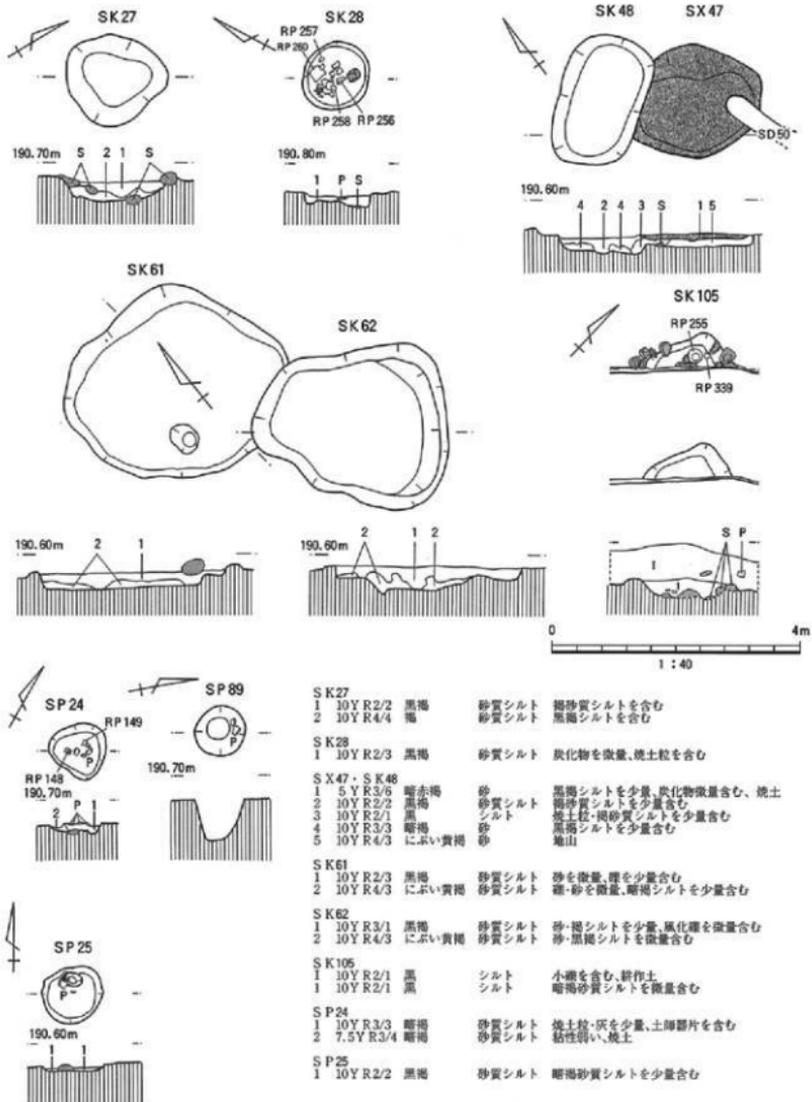
#### 5 性格不明遺構

S X 57(第14図) B・C-2グリッドに位置する。重複関係では、大部分がS T 2に切られる。平面形は不明であるが、方形の可能性が考えられる。大きさは、長軸が約260cm、深さ10cmを測る。覆土は1層である。カマドを伴った竪穴住居跡の可能性も考えられる。北側の底面に焼土が認められ、中からR P 261(第17図103)土師器甕が出土している。底面には細物圧痕がある。その他の遺物では、第17図102の小型の土師器甕が出土している。

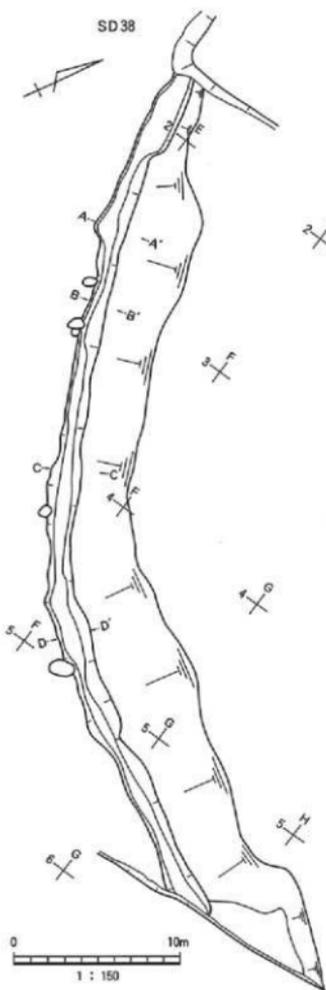
S X 47(第19図) B-3グリッドに位置する。重複関係では、S K 48を切る。平面形は楕円形で、焼土の広がりとして検出された。大きさは、長軸115cm、短軸93cmを測る。焼土の深さは、検出面から5cm程である。遺物は、赤焼土器坏、土師器甕の小破片が出土している。

S X 19(第20図) D-3・4に位置する。重複関係は、S T 1を切り、S P 39・S P 41~46に切られる。大きさは、長軸415cm、短軸200cmを測る。検出時には、焼土の広がりとしてとらえられた。上部は耕作により削平されており、遺存状態は良くない。覆土は1層に分かれ、焼土か焼土を含む層である。北側は堆積層が薄く、焼土のみが残り、南半にかけて土坑状に落ち込んでいる。最も深い部分で34cmである。遺物は、S T 1を掘りこんだ際にS T 1出土の遺物が混入している。赤焼土器坏、土師器坏・甕が出土している。

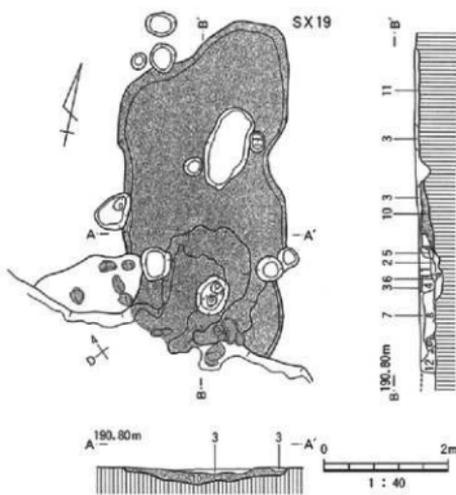




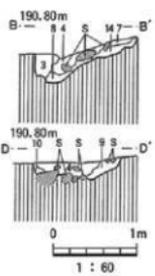
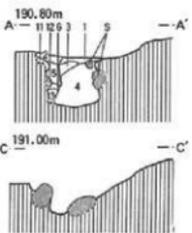
第19図 S K 27・28・48・61・62・105・S X 47・S P 24・25・89



SD38	1	10Y R2/1	黒	シルト	粗砂を少量、炭化物微塵を含む
	2 <th>10Y R2/2</th> <th>黒</th> <th>砂質シルト</th> <th>粗砂シルトを少量含む</th>	10Y R2/2	黒	砂質シルト	粗砂シルトを少量含む
	3 <th>10Y R2/1</th> <th>黒</th> <th>シルト</th> <th>暗褐色シルトを含む</th>	10Y R2/1	黒	シルト	暗褐色シルトを含む
	4 <th>10Y R2/1</th> <th>黒</th> <th>シルト</th> <th>炭化物微塵、暗褐色シルトを少量含む</th>	10Y R2/1	黒	シルト	炭化物微塵、暗褐色シルトを少量含む
	5 <th>10Y R2/3</th> <th>黒</th> <th>砂質シルト</th> <th>にぶい黄褐色シルト・風化礫を少量、粗砂質シルトを含む</th>	10Y R2/3	黒	砂質シルト	にぶい黄褐色シルト・風化礫を少量、粗砂質シルトを含む
	6 <th>10Y R4/3</th> <th>にぶい黄褐色</th> <th>砂</th> <th>黒褐色砂質シルトを含む</th>	10Y R4/3	にぶい黄褐色	砂	黒褐色砂質シルトを含む

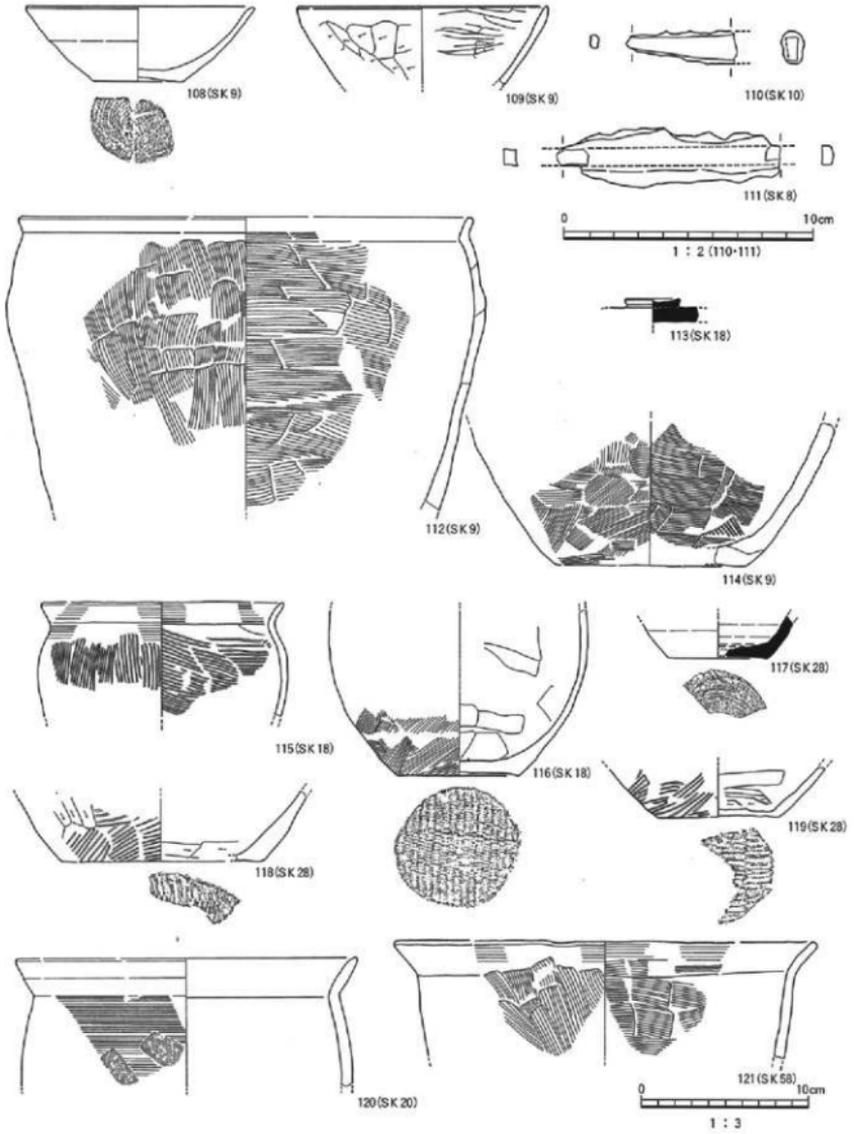


SX19	1	10Y R2/3	黒	シルト	焼土を含む
	2 <th>5 Y R4/5</th> <th>赤褐色</th> <th>砂質シルト</th> <th>黒褐色シルトを含む、焼土</th>	5 Y R4/5	赤褐色	砂質シルト	黒褐色シルトを含む、焼土
	3 <th>10Y R3/3</th> <th>暗褐色</th> <th>砂質シルト</th> <th>焼土・黒シルトを含む</th>	10Y R3/3	暗褐色	砂質シルト	焼土・黒シルトを含む
	4 <th>10Y R3/4</th> <th>暗褐色</th> <th>砂質シルト</th> <th>焼土粒を少量含む</th>	10Y R3/4	暗褐色	砂質シルト	焼土粒を少量含む
	5 <th>10Y R3/2</th> <th>黒褐色</th> <th>砂質シルト</th> <th>炭化物を少量、焼土粒を含む</th>	10Y R3/2	黒褐色	砂質シルト	炭化物を少量、焼土粒を含む
	6 <th>7.5 Y R3/4</th> <th>黒褐色</th> <th>砂質シルト</th> <th>焼土・黒褐色砂質シルトを少量含む</th>	7.5 Y R3/4	黒褐色	砂質シルト	焼土・黒褐色砂質シルトを少量含む
	7 <th>10Y R2/3</th> <th>黒褐色</th> <th>シルト</th> <th>焼土・黒褐色シルトを少量含む</th>	10Y R2/3	黒褐色	シルト	焼土・黒褐色シルトを少量含む
	8 <th>10Y R2/3</th> <th>黒褐色</th> <th>砂質シルト</th> <th>焼土を少量、炭化物を微量含む</th>	10Y R2/3	黒褐色	砂質シルト	焼土を少量、炭化物を微量含む
	9 <th>10Y R2/2</th> <th>黒褐色</th> <th>砂質シルト</th> <th>粗砂質シルト・黒シルト・焼土粒を少量含む</th>	10Y R2/2	黒褐色	砂質シルト	粗砂質シルト・黒シルト・焼土粒を少量含む
	10 <th>5 Y R4/4</th> <th>にぶい赤褐色</th> <th>砂</th> <th>焼土</th>	5 Y R4/4	にぶい赤褐色	砂	焼土
	11 <th>10Y R2/2</th> <th>黒褐色</th> <th>シルト</th> <th>炭化物・粗砂質シルトを少量含む</th>	10Y R2/2	黒褐色	シルト	炭化物・粗砂質シルトを少量含む
	12 <th>10Y R2/1</th> <th>黒</th> <th>砂質シルト</th> <th>S T 1 土・粗砂質シルトを少量含む</th>	10Y R2/1	黒	砂質シルト	S T 1 土・粗砂質シルトを少量含む

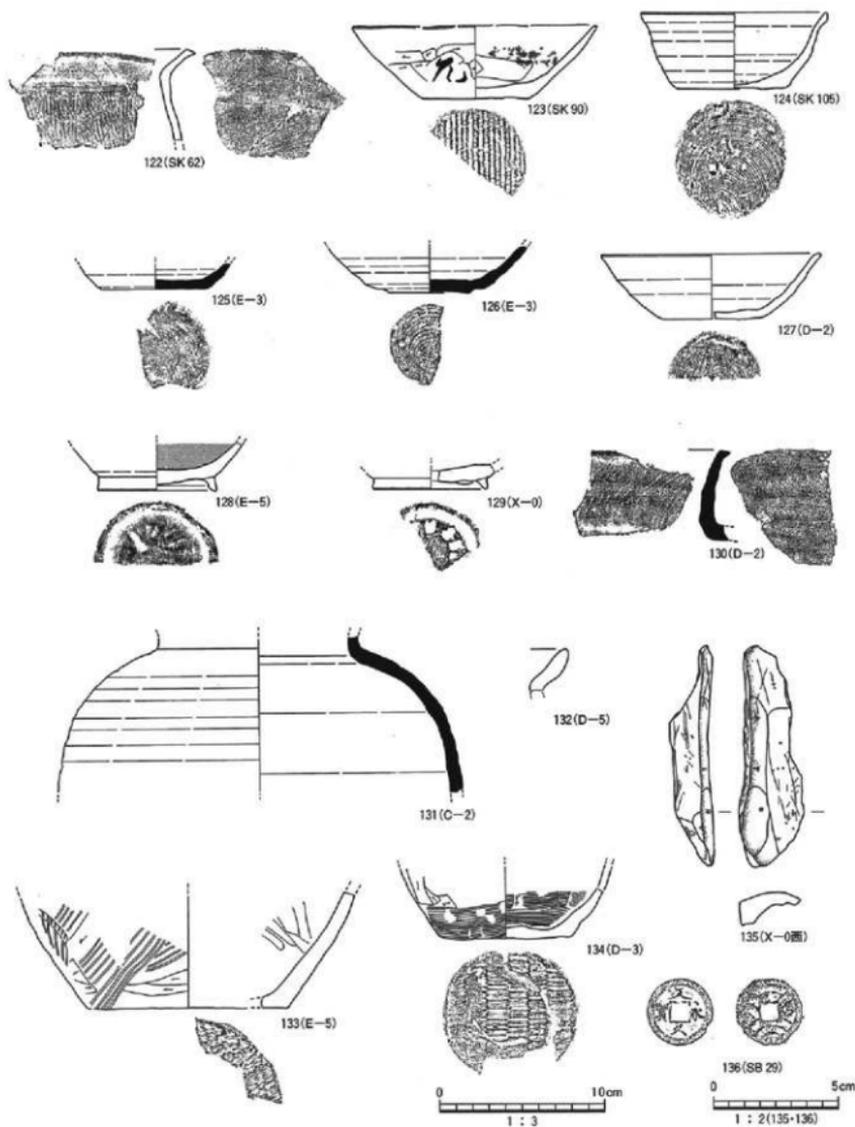


7	10Y R2/1	黒	暗褐色	シルト	円礫・粗砂を含む
8	10Y R3/3	黒	暗褐色	砂	黒シルトを含む
9	10Y R2/2	黒	暗褐色	砂	円礫を含む
10	10Y R2/2	黒	暗褐色	シルト	粗砂シルトを含む
11	10Y R3/3	暗褐色	砂	暗褐色シルト・風化礫を少量、粗砂を含む、地山	
12	10Y R2/2	黒褐色	砂質シルト	粗砂質シルト	粗砂質シルトを微量含む、地山
13	10Y R2/2	黒褐色	砂質シルト	砂	粗砂質シルトを微量含む、地山
14	10Y R4/4	黒	砂	砂	礫を含む、地山

第20図 SX19・SD38



第21図 SK出土遺物



第22図 SK・SB29・グリッド出土遺物

## IV 近世の遺構と遺物

### 1 遺構の分布

近世の遺構は1区に分布する(第4図)。調査区東側では分布が希薄で、西側に広がる傾向がある。1区西側には、S B29掘立柱建物跡があり、周囲に近世の土坑(S K 5・6)や溝状遺構(畑跡)が分布する。溝状遺構は、1区内に散在して認められるが、畝の主軸方向が一致しないものもあるので、全て同時存在とは考えにくい。

### 2 掘立柱建物跡

S B29(第23図) B-1~C-2グリッドに位置する。重複関係は、S D14・15を切る。建物は桁行3間、梁行2間で、桁行3.9m、梁行3.6m、桁行の柱間は1.8m、梁行の柱間は1.0~1.5mである。建物の主軸方向は、N-67°-Wを測る。柱穴は平面形が円形で、直径36cm~58cm、深さ12~31cmを測る。建物の東側の梁行が1間であること、また建物北側の柱列から東側に、間尺が合う柱穴があることから、建物が東側にさらに延びる可能性も考えられる。また、S P113も、S B29の南側の柱列にのり、E B30と37の中間に位置するため、建物を構成する柱穴と考えられる。遺物は、E B32から、第22図136の江戸時代の銭貨「文久永寶」(1863年鑄造)が出土している。

### 3 溝状遺構(畑跡)

S D11~13・15~17(第23図) A-1~C-2グリッドに位置する。重複関係では、S B29に切られる。長さ1.4~14.4m、幅10~70cm、深さ4~13cmを測る。主軸はN-30°-Eである。底面に鋤跡が認められる。遺物は、S D11から近世の陶磁器破片が出土している。

S D49~53(第24図) B・C-3グリッドに位置する。重複関係であるが、S X47を切る。長さ1.0~2.65m、幅15~30cm、深さは5cm程度である。S D49~52は、主軸方向がN-31.5°-W、S D53のみが、主軸方向がN-2°-Eとなる。

S D74・84~87(第24図) E-3グリッドに位置する。重複関係は、S D38を切り、S K63に切られる。長さ1.1~1.75m、幅25~70cm、深さ6~12cm、主軸はN-13°-Eを測る。

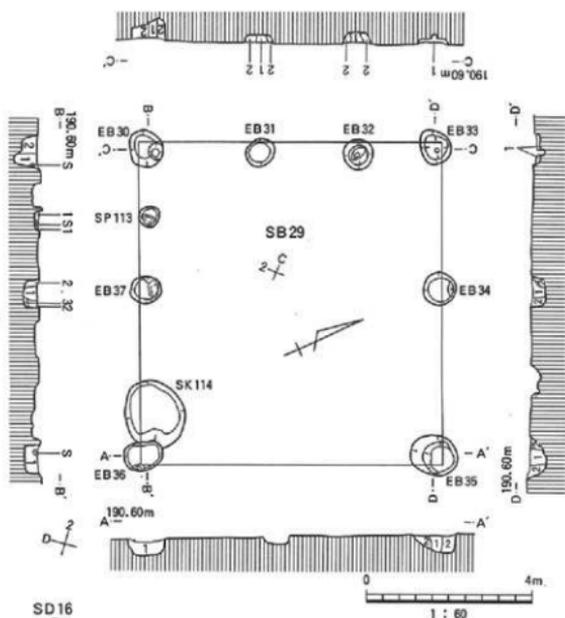
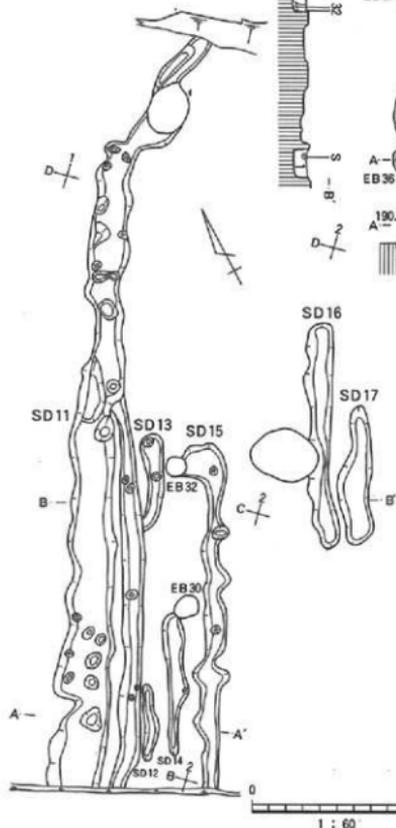
S D72・88(第24図) E-4グリッドに位置する。重複関係は、S K71に切られる。長さ1.7~1.8m、幅30~65cm、深さ10cm程である。主軸はN-33°-Eである。

### 4 土坑

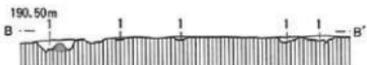
S K 5(第24図) C-1・2グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸145cm、短軸113cm、深さ30cmを測る。覆土は2層で、暗褐色砂質シルトである。遺物の出土はない。

S K 6(第24図) C-1グリッドに位置する。平面形は不整形円で、大きさは長軸75cm、深さ10cmを測る。摩耗した土師器の小破片が出土している。

- E B 30**  
 1 10Y R 2/2 黒褐色 砂質シルト 炭化物・褐砂質シルトを少量含む  
 2 10Y R 2/2 黒褐色 砂質シルト 褐砂質土をやや多く含む
- E B 31・32・33**  
 1 10Y R 4/4 褐色 砂質シルト 炭質シルトを少量含む  
 2 10Y R 2/2 黒褐色 砂質シルト 小礫・褐砂質シルトを少量含む
- E B 34**  
 1 10Y R 2/1 黒 砂質シルト 褐砂質シルトを少量含む  
 2 10Y R 2/2 黒褐色 砂質シルト 褐砂質シルトを少量含む

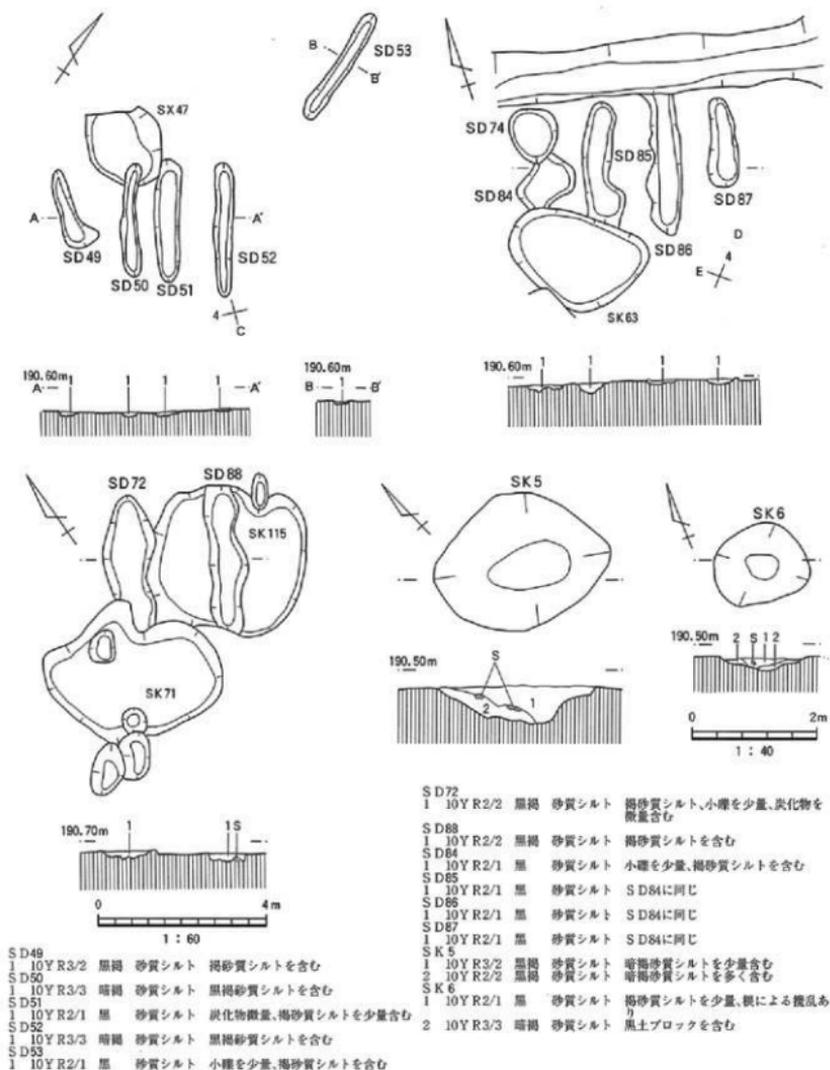


- E B 35**  
 1 10Y R 2/1 黒褐色 砂質シルト 褐砂質シルトを少量含む  
 2 10Y R 2/2 黒褐色 砂質シルト 褐砂質シルトをやや多く含む
- E B 36**  
 1 10Y R 2/2 黒褐色 砂質シルト 炭化物を微量、褐砂質シルトを局所に含む
- E B 37**  
 1 10Y R 2/2 黒褐色 砂質シルト 褐砂質シルトを含む  
 2 10Y R 2/2 黒褐色 砂質シルト 褐砂質シルトをやや多く含む  
 3 10Y R 4/4 褐色 砂質シルト 黒褐色シルトを含む
- S P 113**  
 1 10Y R 2/2 黒褐色 砂質シルト 褐砂質シルトを含む



- S D 11**  
 1 10Y R 2/1 黒 砂質シルト 褐砂質シルトを含む
- S D 12**  
 1 10Y R 2/1 黒 砂質シルト 褐砂質シルトを含む
- S D 13**  
 1 10Y R 2/2 黒褐色 砂質シルト 褐砂質シルトを含む
- S D 14・15・16・17**  
 1 10Y R 2/1 黒 砂質シルト SD11に同じ

第23図 SB29・SD11~17



第24図 SD49~53・72・74・84~88・SK5・6

表1 平安時代土器観察表(1)

検出層	種別	器種	出土地点単位	計測値(mm)			色	調査・成形				備考	
				口径	高さ	底径		厚	外	内	底		面
第1層	1	甕形部	環	ST1F	125.5	40	48	4.5Y6/1灰	ロクロ	ロクロ	陶板	底面	SK19Fと整合
	2	甕形部	環	ST1F1	(138)	39.5	60	4.5Y6/1灰	ロクロ	ロクロ	陶板	底面	
	3	甕形部	環	ST1F	(144)	45	58	4.5Y6/1灰	ロクロ	ロクロ	陶板	底面	
	4	甕形部	環	ST1F	(150)	47	(70)	3.7.5Y R7/4に多い	ロクロ	ロクロ	陶板	底面	
	5	甕形部	環	ST1F	(150)	53.5	(54)	4.5Y5/1灰	ロクロ	ロクロ	陶板	底面	
	6	甕形部	環	ST1F	(136)			4.5Y6/2Rキープ	ロクロ	ロクロ			
	7	甕形部	環	ST1F			(90)	3.7.5Y R5/1灰	ロクロ	ロクロ			
	8	甕形土器	環	ST1F	(132)	36.5	(80)	4.10Y R7/6明黄緑	ロクロ	ロクロ			
	9	甕形土器	環	ST1F	(129)	51	56	3.7.5Y R5/4に多い	ロクロ	ロクロ			
	10	甕形土器	環	ST1F			(81)	5.5Y R6/2灰	ロクロ	ロクロ			
第2層	11	大甕形	環	ST1F			6.7.5Y R8/4黄緑	ケズリ	ナデ			SK19Fと整合	
	12	大甕形	環	ST1F	126	48	36	6.10Y R8/4黄緑	ケズリ	ナデ			
	13	大甕形	環	ST1F			62	3.7.5Y R7/6	ロクロ	ナデ			
	14	高台形	高台杯	ST1F			76	3.5Y5/1灰	ロクロ	ロクロ			
	15	高台土器	高台杯	ST1F			(84)	4.7.5Y R7/4に多い	ロクロ	ロクロ			
	16	高台土器	高台杯	ST1F			(90)	5.7.5Y R6/4に多い	ロクロ	ロクロ			
	17	高台土器	高台杯	ST1F			(90)	2.5Y R6/6	ロクロ	ロクロ			
	18	高台土器	高台杯	ST1F			70	4.5.10Y R5/3に多い	ロクロ	ロクロ			
	19	高台土器	高台杯	ST1F			(58)	4.5.10Y R7/4に多い	ロクロ	ロクロ			
	20	高台土器	高台杯	ST1F	(100)			5.7.5Y5/1灰	ロクロ	ロクロ			
第3層	21	高台土器	高台杯	ST1F			(68)	3.7.5Y6/2灰	ナデ	ナデ		高台内側ロクロナデ	
	22	高台土器	高台杯	ST1F			(100)	8.5.5B5/1青灰	ケズリ	ナデ			
	23	大甕形	環	ST1F				11.10Y R8/3黄緑	ハケメ	削り込み			
	24	大甕形	環	ST1F			(194)	5.3.10Y R7/4に多い	ハケメ	ハケメ			
	25	大甕形	環	ST1F			(142)	5.3.10Y R7/4に多い	ハケメ	ハケメ			
	26	大甕形	環	ST1F				3.10Y R8/3黄緑	ハケメ	ハケメ			
	27	大甕形	環	ST1F				3.10Y R7/4に多い	ハケメ	ハケメ			
	28	大甕形	環	ST1F				6.2.5Y7/2R素	ハケメ	ハケメ			
	29	大甕形	環	ST1F			(84)	3.2.5Y7/1灰白	ケズリ	ハケメ			
	30	大甕形	環	ST1F			75	6.7.5Y R8/4黄緑	ハケメ	ハケメ			
第4層	31	大甕形	環	ST1F			(110)	10Y R8/3黄緑	ハケメ	ハケメ		底面に菊花紋	
	32	大甕形	環	ST1F			(90)	6.10Y R8/2R白	ハケメ	ケズリ			
	33	大甕形	環	ST1F			(72)	7.7.5Y R8/3黄緑	ケズリ	ケズリ			
	34	大甕形	環	ST1F			(103)	10Y R7/4に多い	ケズリ	ケズリ			
	35	大甕形	環	ST1F			(12)	10Y R8/2R白	ハケメ	ハケメ			
	36	大甕形	環	ST1F				10Y R8/3黄緑	ナデ	ナデ			
	37	高台土器	高台杯	ST1F2	(138)	43.5	52	4.7.5Y6/1灰	ロクロ	ロクロ			
	38	高台土器	高台杯	ST1F2	(139)	45	(50)	4.5Y R6/6	ロクロ	ロクロ			
	39	高台土器	高台杯	ST1F2	(133)	36.5	(60)	4.2.5Y5/1黄灰	ロクロ	ロクロ			
	40	高台土器	高台杯	ST1F2	(138)			4.5Y5/1灰	ロクロ	ロクロ			
第5層	41	高台土器	高台杯	ST1F2			58	3.7.5Y R7/6	ロクロ	ロクロ		SK4と整合	
	42	高台土器	高台杯	ST1F2	(116)	42	(52)	7.5.10Y R8/4黄緑	ケズリ	ナデ			
	43	高台土器	高台杯	ST1F2			112	7.5.10Y R8/3黄緑	ロクロ	ナデ			
	44	高台土器	高台杯	ST1F2	(150)			5.7.5Y3/1キープ	ロクロ	ロクロ			
	45	高台土器	高台杯	ST1F2			(165)	4.10Y2/1黒	ロクロ	ナデ			
	46	高台土器	高台杯	ST1F2				7.10Y4/1灰	平行タタキ目	同心円状ア字			
	47	高台土器	高台杯	ST1F2			(94)	6.10Y R7/3に多い	ハケメ	ハケメ			
	48	高台土器	高台杯	ST1F2	(170)	74	(94)	6.5.10Y R6/3に多い	ハケメ	ハケメ			
	49	高台土器	高台杯	ST1F2	(180)			5.7.5Y R6/4に多い	ハケメ	ハケメ			
	50	高台土器	高台杯	ST1F2			(108)	7.10Y R8/2R白	ハケメ	ハケメ			
第6層	51	高台土器	高台杯	ST1F2				6.10Y R5/3に多い	ハケメ	ハケメ		SK4と整合	
	52	高台土器	高台杯	ST1F2			80	6.10Y R8/3黄緑	ハケメ	ハケメ			
	53	高台土器	高台杯	ST1F2			(70)	9.10Y R8/3黄緑	ハケメ	ハケメ			
	54	高台土器	高台杯	ST1F2	146	44	60	4.2.5Y6/2R素	ロクロ	ロクロ			
	55	高台土器	高台杯	ST1F1	(141)			4.3.5Y4/1灰	ロクロ	ロクロ			
	56	高台土器	高台杯	ST1F1			(58)	4.5B6/1青灰	ロクロ	ロクロ			
	57	高台土器	高台杯	ST1F1			39	7.5Y R4/1黄灰	ロクロ	ロクロ			
	58	高台土器	高台杯	ST1F1	192	125	93	5.7.5Y R7/6	ハケメ	ハケメ			
	59	高台土器	高台杯	ST1F1	(210)			5.7.5Y R6/4に多い	ハケメ	ハケメ			
	60	高台土器	高台杯	ST1F1	(260)	340	(116)	8.10Y R8/2R白	ハケメ	ハケメ			
第7層	61	高台土器	高台杯	ST1F1			(100)	7.5Y R7/3に多い	ハケメ	ハケメ		SK4と整合	
	62	高台土器	高台杯	ST1F1			(68)	4.5Y R6/4に多い	ハケメ	ハケメ			
	63	高台土器	高台杯	ST1F1			(80)	6.5Y R6/6	ロクロ	ロクロ			
	64	高台土器	高台杯	ST1F1			(108)	8.10R G6/1青灰	ロクロ	ロクロ			
	65	甕形土器	高台杯	ST1E L54F			(60)	6.5Y R6/6	ロクロ	ロクロ			
	66	甕形土器	高台杯	ST1E L54F			(108)	8.10R G6/1青灰	ロクロ	ロクロ			
	67	甕形土器	高台杯	ST1E L54F	130	124	(77)	6.7.5Y R7/3に多い	ハケメ	ハケメ			
	68	甕形土器	高台杯	ST1E L54F	(182)			3.10Y R7/4に多い	ケズリ	ナデ			
	69	甕形土器	高台杯	ST1E L54F	(286)			6.5Y R7/6	ハケメ	ナデ			
	70	甕形土器	高台杯	ST1E L54F	(236)			5.3.7.5Y R8/4黄緑	ハケメ	ハケメ			
第8層	71	甕形土器	高台杯	ST1E L54F			(100)	3.10Y R8/1灰白	ハケメ	ハケメ		SK4と整合	
	72	甕形土器	高台杯	ST1E L54F			(77)	3.10Y R7/3に多い	ハケメ	ケズリ			
	73	甕形土器	高台杯	ST1E L54F			(72)	10Y R7/4に多い	ハケメ	ケズリ			
	74	甕形土器	高台杯	ST1E L54F				7.7.5Y R5/1黄灰	格子状タタキ目	同心円状ア字			

表2 平安時代土器観察表(2)

探検番号	種別	器種	出土地点・層位	計測値(mm)			色調	調整・成形				備考
				長さ	幅	高さ		外面	内面	底面	調整	
76	赤土器	壺	ST 1 E K94 F	138	49.5	54	5.25Y R/6	ロクロ	ロクロ	黒色染	調整済	
77	赤土器	壺	ST 1 E K94 F	(135)	50	(56)	6.7.5Y R/4に赤い	ロクロ	黒色染	ミガキ	調整済	ST 2 E L55 Y と融合
78	赤土器	壺	ST 1 E K94 F	131	52	57	5.5.2.5Y R/2	ロクロ	ロクロ	調整済		
79	赤土器	高台杯	ST 1 E K94 F		(62)		5.7.5Y R/4に赤い	ロクロ	黒色染	ミガキ	調整済	
80	赤土器	壺	ST 1 E K94 F		(58)		5.10Y R/6	ロクロ	ロクロ	調整済		
81	赤土器	壺	ST 1 E K94 F		(53)		4.5.2.5Y R/2	ロクロ	ロクロ	調整済		
82	赤土器	壺	ST 1 E K94 F		90		6.5Y R/6	ロクロ	ロクロ	調整済		
83	赤土器	壺	ST 1 E K94 F		(84)		9.7.5Y R/3	ロクロ	ロクロ	調整済		
84	赤土器	壺	ST 1 E K94 F	(142)			4.5Y R/7	ロクロ	ロクロ	調整済		
85	赤土器	壺	ST 1 E K94 F	(122)			3.5Y R/5	ロクロ	ロクロ	調整済		
86	赤土器	壺	ST 1 E P107 F	(224)			6.7.5Y R/4に赤い	ロクロ	ロクロ	調整済		
87	赤土器	壺	ST 1 E P107 F	(124)	41	56	2.5.5B 5/1	ロクロ	ロクロ	調整済		
88	赤土器	壺	ST 1 E P107 F	(126)	47	54	3.5Y R/6	ロクロ	ロクロ	調整済		
89	赤土器	壺	ST 1 E P107 F				9.5.2.5Y R/2	ロクロ	ロクロ	調整済		
90	赤土器	壺	ST 1 E P107 F		104		8.10Y R/7	ロクロ	ロクロ	調整済		
91	赤土器	壺	ST 2 F		52		5.7.5Y R/6	ロクロ	ロクロ	調整済		
92	赤土器	壺	ST 2 F		72		4.7.5Y R/7	ロクロ	ロクロ	調整済		
93	赤土器	壺	ST 2 Y		(50)		5.7.5Y/1	ロクロ	ロクロ	調整済		
94	赤土器	壺	ST 2 Y	136	117	(80)	4.7.5Y R/4に赤い	ロクロ	ロクロ	調整済		ST 1 F・F 2 と融合
95	赤土器	壺	ST 2 F		(100)		7.10Y R/6	ロクロ	ロクロ	調整済		
96	赤土器	壺	ST 2 E L55 Y	147	138	78	6.7.5Y R/2	ロクロ	ロクロ	調整済		R P345・ST 1 と融合
97	赤土器	壺	ST 2 F		104		7.10Y R/6	ロクロ	ロクロ	調整済		
98	赤土器	壺	ST 2 E L55 F		(80)		7.10Y R/7	ロクロ	ロクロ	調整済		
99	赤土器	壺	ST 2 F	(416)			9.10Y R/6	ロクロ	ロクロ	調整済		口縁に遺状文
100	赤土器	壺	ST 2 F				14.5Y R/2	ロクロ	ロクロ	調整済		ST 1 F と融合
101	赤土器	壺	ST 2 E L55 Y		82		6.5.10Y R/3	ロクロ	ロクロ	調整済		R P146
102	赤土器	壺	SX5Y	(137)			7.7.5Y R/4	ロクロ	ロクロ	調整済		
103	赤土器	壺	SX5Y		(70)		7.10Y R/4	ロクロ	ロクロ	調整済		R P261
104	赤土器	壺	SK 4	(143)	48.5	58	4.5Y R/7	ロクロ	ロクロ	調整済		
105	赤土器	壺	SK 4 F 1	(144)	62	64	5.5Y R/7	ロクロ	ロクロ	調整済		ST 1 F 2 と融合・強く焼熟
106	赤土器	壺	SK 4 F 1		(96)		9.10Y R/6	ロクロ	ロクロ	調整済		
107	赤土器	壺	SK 4 F				8.5B 5/1	ロクロ	ロクロ	調整済		
108	赤土器	壺	SK 9 F	(130)	46.5	56	4.5Y R/7	ロクロ	ロクロ	調整済		R P132
109	赤土器	壺	SK 9 F	(132)			4.10Y R/8	ロクロ	ロクロ	調整済		R P131
110	赤土器	壺	SK 9 F	(224)			7.10Y R/7	ロクロ	ロクロ	調整済		R P132・133
113	赤土器	壺	SK 18 F				9.7.5Y R/1	ロクロ	ロクロ	調整済		天部層に赤土
114	赤土器	壺	SK 9 F		(114)		9.10Y R/7	ロクロ	ロクロ	調整済		R P135・136
115	赤土器	壺	SK 18 F	(146)			5.10Y R/3	ロクロ	ロクロ	調整済		
116	赤土器	壺	SK 18 F		73		4.2.5Y R/6	ロクロ	ロクロ	調整済		
117	赤土器	壺	SK 28 F		(60)		6.5.8Y R/6	ロクロ	ロクロ	調整済		R P256
118	赤土器	壺	SK 28 F		(120)		5Y R/6	ロクロ	ロクロ	調整済		
119	赤土器	壺	SK 28 F		(72)		5.7.5Y R/4に赤い	ロクロ	ロクロ	調整済		
120	赤土器	壺	SK 20	(206)			7.7.5Y R/7に赤い	ロクロ	ロクロ	調整済		
121	赤土器	壺	SK 58 F	(256)			7.10Y R/2	ロクロ	ロクロ	調整済		
122	赤土器	壺	SK 62 F				6.5.10Y R/4に赤い	ロクロ	ロクロ	調整済		
123	赤土器	壺	SK 90 F	(148)	45	64	4.5.10Y R/2	ロクロ	ロクロ	調整済		黒色染
124	赤土器	壺	SK 105	113	47	70	4.5Y R/7	ロクロ	ロクロ	調整済		R P255
125	赤土器	壺	E-3		(62)		4.2.5Y/1	ロクロ	ロクロ	調整済		
126	赤土器	壺	E-3		49		5.10Y R/1	ロクロ	ロクロ	調整済		
127	赤土器	壺	D-2	(112)	40	(60)	4.5.7.5Y R/6	ロクロ	ロクロ	調整済		
128	赤土器	高台杯	E-5		72		5.2.5Y/8	ロクロ	ロクロ	調整済		黒色染
129	赤土器	高台杯	X-0		(70)		2.5Y R/6	ロクロ	ロクロ	調整済		黒色染
130	赤土器	壺	D-2				8.10Y/1	ロクロ	ロクロ	調整済		
131	赤土器	壺	C-7				6.5.5B 5/1	ロクロ	ロクロ	調整済		
132	赤土器	壺	D-5				8.10Y R/6	ロクロ	ロクロ	調整済		
133	赤土器	壺	E-5		(120)		8.10Y R/2	ロクロ	ロクロ	調整済		
134	赤土器	壺	D-3		82		4.7.5Y R/7に赤い	ロクロ	ロクロ	調整済		

表3 石製品・金属製品観察表

探検番号	種別	器種	出土地点・層位	計測値(mm, g)				破損の有無	調整	備考
				長さ	幅	高さ	重量			
第91837	石製品	砥石	ST 1 F	(44.5)	23	12	15.6	有	4面に研ぎ痕跡	砥灰岩
第1118955	金属製品	刀子	ST 1 F 2	(44)	18	3	5.3	基部が欠損		鉄製品
第1118975	金属製品	不明	ST 1 E L54	(39)	(39)	3	8.5	有		鉄製品・形状で末端が少し湾曲
第2118110	金属製品	釘	S K 10	(43)	9	4.5	12.1	基部が欠損		鉄製品・R M273
第2118111	金属製品	釘	S K 8	(90)	8	5	47.1	両端を欠損		鉄製品
第2218135	石製品	砥石	X-0・西	(90)	(26)	(13)	19.8	断面分に破損	2面に研ぎ痕跡	砥灰岩
第2218136	金属製品	銚貨	S B 29 E B 32	20		1.2	3.1	完全		文久永寶(明治年1863)

## V 縄文時代の遺物

今回の調査によって出土した縄文時代の遺物は、縄文土器・石器・石製品である。内訳は、縄文土器が整理箱で7箱程度、石器・石製品が1箱程度となる。

### 1 縄文土器(第25図1～28、第26図29～63)

本調査によって出土した縄文土器は、大半が縄文時代中期～後期にかけての土器であり、僅かながら前期の土器も出土した。大半が小片で、形状の確認できるものは数点のみである。それらの縄文土器は、ほとんどが1区から出土している。2区からの出土は僅かである。

縄文時代の遺構は確認されなかったが、1区の東端(F-5～G-5グリットの範囲内)に縄文中期の遺物包含層が確認できる。その為、1区と2区の間を走り、包含層を切るS D38溝跡(平安時代)からは多くの縄文土器が出土している。その他の地点から出土した縄文土器は、1区東端の包含層、もしくは周辺からの混入と考えられる。

これらの縄文土器を、器形・文様構成・施文手法等から既存の分類を基準として、時期の古い順に11群に分類し記述する。

#### 第1群土器(第25図1)

大木3式に含まれる土器を本群とする。格子状の沈線文と弧状の沈線文を有し、器種は深鉢である。焼成は良好である。

#### 第2群土器(第25図2)

大木6式に含まれる土器を本群とする。半截竹管を断続的に引いた沈線文を施し、口縁部は内湾する。器種は深鉢で、胎土には石英等を含み、焼成は比較的良好い。

#### 第3群土器(第25図3・5)

大木7a式に含まれる土器を本群とする。S D38とその周辺で2点出土している。3は、口縁部に縦位短沈線文を施し、その下に横位の沈線文を施す深鉢である。口縁内面は、くの字状に肥厚する。5は、楕円形の浅鉢で波状口縁となる。複合口縁で、連続して刺突文を施してある。

#### 第4群土器(第25図4・6～13)

大木7b式に含まれる土器を本群とする。S D38とその近辺で9点出土している。4は、横位平行沈線文を施し、その間に縦位に押圧縄文を施す深鉢である。6は、口縁上部に連続して斜位の押圧縄文を施し、その下に、横位の押圧縄文を施す。7は深鉢であり、口唇部に縦に刻目状の押圧縄文を施し、口縁部には、弧状に押圧縄文を有す。8は深鉢であり、綾格文が施される。9は深鉢であり、斜位に押圧縄文を施す。焼成はやや不良である。10は口縁が内湾し、内面はくの字状に肥厚する深鉢で、口唇部に波状に隆帯を貼り付け、波頂部分では渦巻状に変化する。波状隆帯の部分にのみ、篋状工具で刻目文を施す。口縁部は、突起部分の左右に楕円状の区画文を有し、内側に交互刺突文が施される。11は深鉢であり、石英等を含んだ胎土を使用し、焼成はやや不良である。口唇部に隆帯を貼り付け、その上に押圧縄文を施す。12は深鉢

であり、焼成はやや不良である。口縁部に波状や斜行状に隆帯を貼り付け、その上に押圧縄文を施す。口縁内面には、「C」字状に粘土紐が貼りつけられる。13は、11・12と同様に、隆帯上に押圧縄文を施す。口縁上部には波状の隆帯を貼り付けた痕跡が有るが、剥落している。縄文は口縁上部は横位、下部は縦位に施文する。

#### 第5群土器(第25図14~21)

大木8a式に含まれる土器を本群とする。SD38を中心にST1等でも出土し、8点を数える。14は、横位に連続して縦位押圧縄文を施し、その下に沈線文を添わせる。15は深鉢であり、胎土に石英等を多量に含み、焼成は不良である。横状の隆帯文を施す。16は深鉢であり、口縁部は外反する。隆帯を貼り付け、縦位押圧縄文を2段連続して施す。口縁上部には隆帯を貼り付けた痕跡があるが、剥落している。口縁内面は、渦巻状の隆帯を貼り付ける。17は深鉢であり、口縁部は内湾する。口縁部上部に刺突文が連続して施され、橋状の把手が付く。18は、口縁上部に波状の隆帯を貼り付け、口縁部は小波状になる。隆帯の下には、横位に連続して刺突文が施される。19は深鉢であり、口縁部は外反する。口縁部に、波状に隆帯が貼り付けられ、体部には、横位に一条の隆帯が貼り付けられる。20と21は接合はしないが、同一個体である。20は、横位の隆帯文や隆沈線文を有する。21はクランク状に隆帯が貼り付けられる。

#### 第6群土器(第25図22~28)

大木8b式に含まれる土器を本群とする。SD38やST1等から7点出土している。22は、深鉢であり、口縁部は内湾する。口唇部には断面U字状の溝状の隆沈線文を有する。口縁部は横位に平行隆沈線文を施し、その間に篋状工具による斜位の刻目文が連続して施される。沈線や口縁内面は、丁寧にミガキを施す。23は、口縁部の内湾する深鉢である。胎土は石英等を多量に含み、焼成は不良である。口縁上部に沈線による渦巻文を施す。24は、23と同様に沈線による渦巻文を有す。25は、隆沈線による渦巻文を有す。26は浅鉢であり、焼成は良好である。口縁部に縦位の沈線文が施される。体部は、2重の弧状沈線文を有す。27は深鉢の底部である。体部は縦位の沈線文を有す。28は深鉢であり、横位と斜位に沈線文を有する。

#### 第7群土器(第26図29~32)

大木9式に含まれる土器を本群とする。SK60等から4点出土している。29は深鉢であり、焼成は良好である。縦位の隆沈線文を有す。30は、渦巻状の沈線文を有し、一部分縦位沈線文が認められる。31は、沈線による楕円状の文様を有す。32は、口縁上部が無文の波状口縁で、やや外反する。縄文原体による押圧縄文を有する。

#### 第8群土器(第26図33~36)

大木10式に含まれる土器を本群とする。ST1・2やSK22・64から4点出土している。33・34は、沈線で区画された文様内に、縄文が充填される。35・36は、低い稜状の隆沈線文を有し、36はその内側に縄文を施す。

#### 第9群土器(第26図37~43)

縄文時代後期前葉に含まれる土器を本群とする。ST1・SK4やSD11・SP42等から7点出土している。37と38は共に刺突文と、沈線による楕円文を有する。37は、内側に丁寧なミ

ガキが施される。39は、刺突文・沈線文を施す。内面にはミガキが施されている。40は、横位の平行沈線文を有し、その間に、篋状工具による刻目文が連続的に施される。41は、横位と斜位に沈線文を有す。42は、入り組み状の沈線文を有する。胎土は粗砂が混入する。43は、斜位に3本1単位の沈線文を有する。

#### 第10群土器(第26図44~54)

縄文時代後期中葉に含まれる土器を本群とする。ST1を中心にST2・SK9等から11点出土している。44と45は共に、口縁端部と平行沈線文間に縦位刻目文を施す。44は、口縁内面がくの字に肥厚する。45は、内側に丁寧なミガキが施されている。46は、口縁上部に縦位の刻目文を有し、その下に沈線文が横位に施される。47と48は、口縁部に沈線文を横位に有し、口縁上部は縄文を施文し、下部は無文となる。47は、口縁上部に波状に垂下する沈線文を有す。49は、口縁下部に横位の沈線文を有し、口縁はやや外反する。縄文は、横位・縦位に施文され、羽状縄文となる。50は、横位に沈線文を有す。51は、口縁部に横位の沈線文を有し、上部は無文である。52は、口縁上部に横位の平行沈線文を有す。53は、50と同様に横位の沈線文を有し、上部は無文となる。54は、縦位の条線文を有す。

#### 第11群土器(第26図55~56)

縄文時代後期後葉に含まれる土器を本群とする。SK4等から2点出土している。55は、壺の体部破片で貼瘤を有し、その瘤上に十字に刻目文が施される。56は、口縁上部に連続して貼瘤を有する。

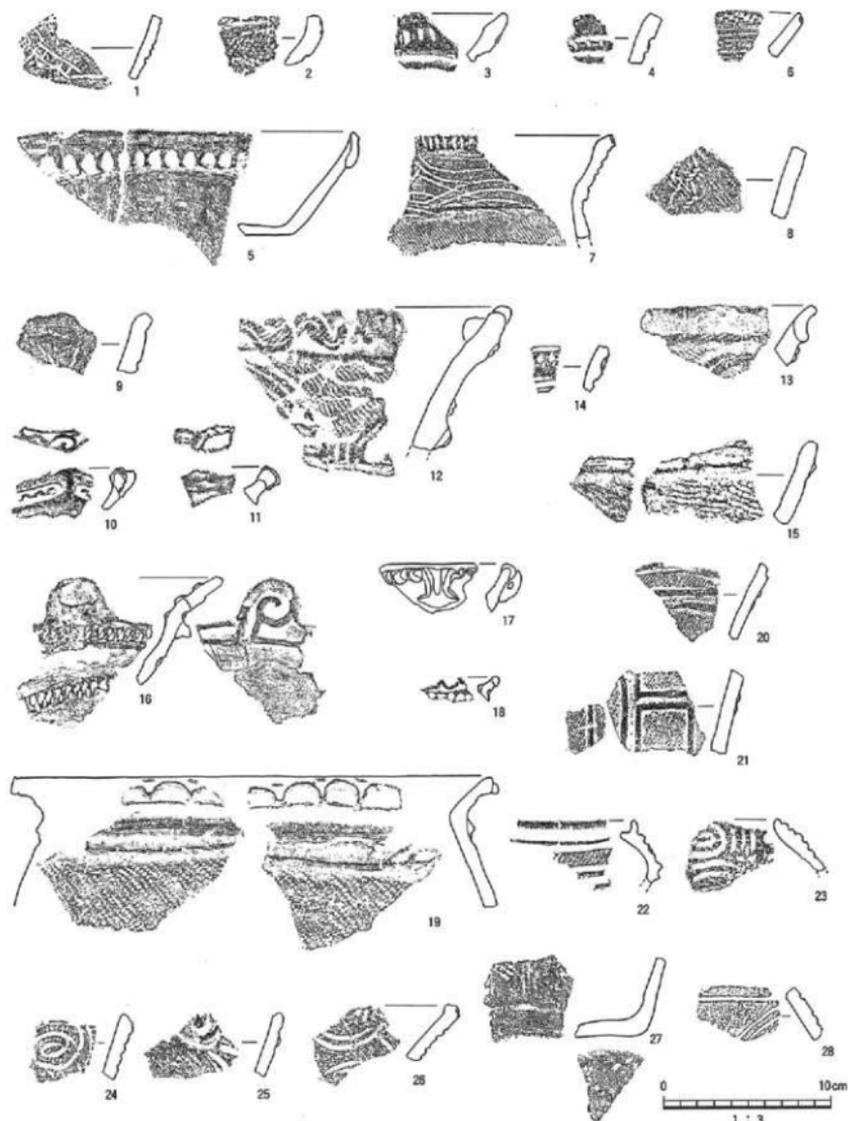
#### 体部・底部資料(第26図57~63)

57は深鉢体部破片で、三角形の沈線文、二本の平行沈線文が施される。58は撚糸文が施される。59は無節の縄文が、60は反撚りのRR縄文が施される。61~63は底部資料で、61の底部は無文、62・63は網代痕が施される。

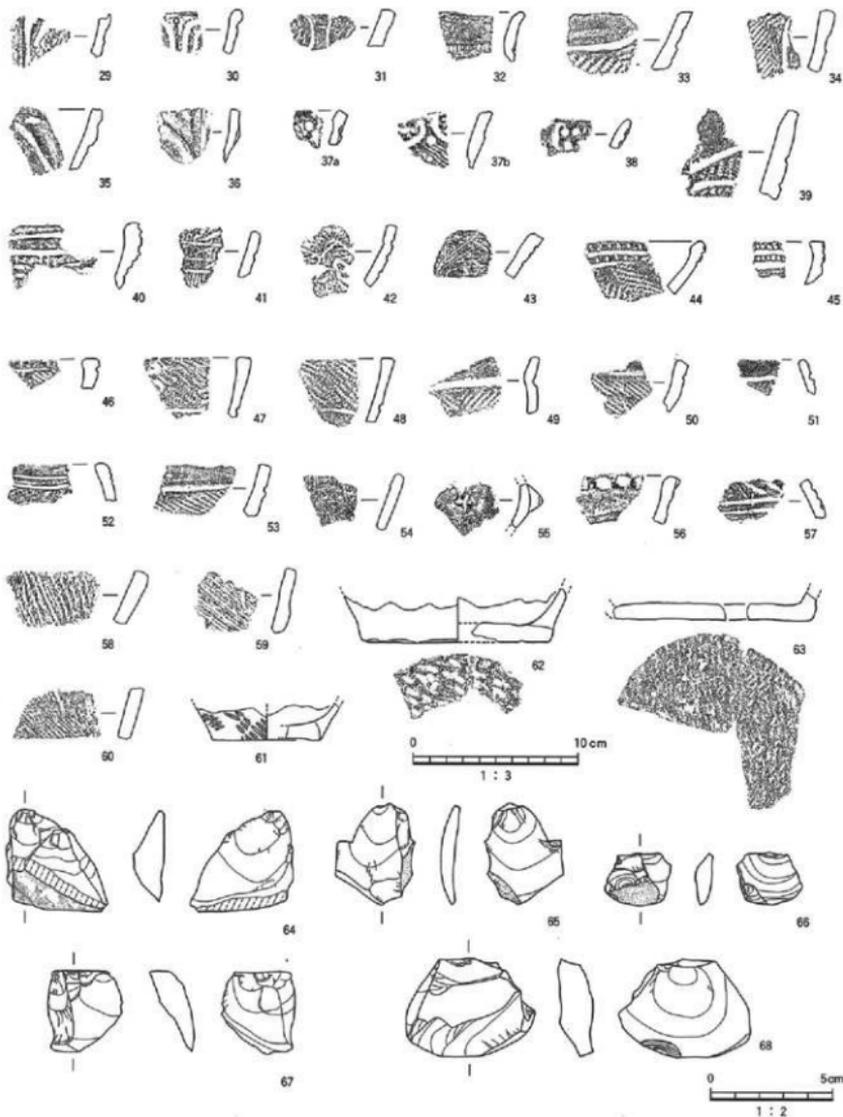
## 2 石器・石製品(第26図64~68、第27図69~75)

本調査によって出土した石器は11点、石製品は1点となっている。石器の石材は、ほとんどが頁岩である。縄文土器と同様に縄文時代の遺構が確認できない為、1区包含層、周辺からの混入と考えられる。

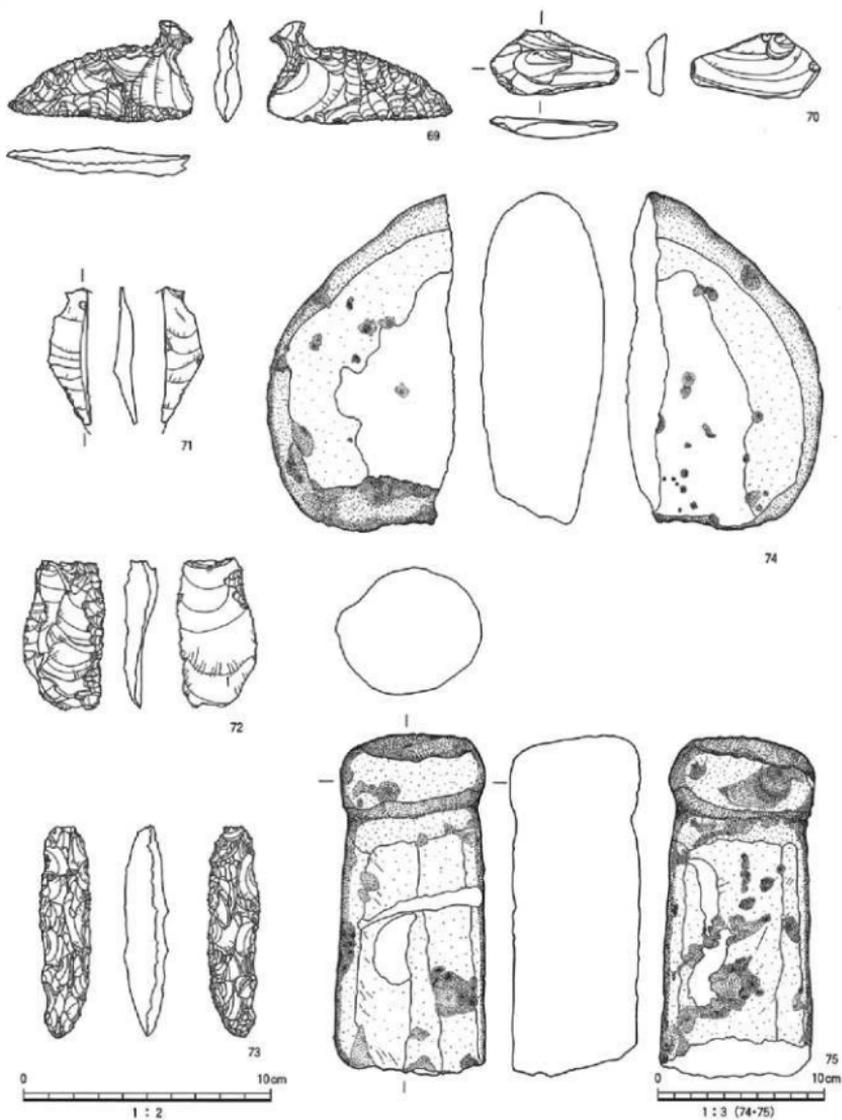
64~68は、剥片である。70は二次加工のある剥片であり、背面側の右側縁を一部調整加工している。69は石匙である。つまみを上に据えた時、下端縁辺が刃部となる。横形で背面を表にして据えた時、左に長い。71は搔器である。縦半分を破損している。縦長剥片を素材とし、背面側の左端縁の一部を調整加工している。72は削器である。背面側の両縁に調整加工を施し、刃部を作出する。腹面側左縁の一部の基部のみ、両面調整を施す。73は石篋である。両面を調整加工し、棒状に作出する。先端部に細かく2次加工を施し刃部とする。74は磨石である。扁平な礫で石材は砂岩であり、磨面が2面ある。後に、炉石等に用いられたらしく、一部に焼跡がある。75は石棒である。凝灰岩を調整加工によって形を整えている。頭部と体部に分けられる形状をしており、体部の全面にわたり擦痕がある。



第25図 縄文土器



第26図 縄文土器・石器



第27図 石器・石製品

表4 縄文土器観察表(1)

神岡No.	出土地点	器種	部位	計測値(mm)			分類(群)	文様	縄文
				口径	底径	器厚			
第4	1 S X 19	深鉢	体部			7	1	格子状、弧状沈線文	LR
	2 S T 1	深鉢	口縁部			10.5	2	沈線文	LR
	3 S D 38	深鉢	口縁部			8	3	縦位短沈線文	
	4 F-5	深鉢	体部			9	4	押圧縄文・平行沈線文	原体不明
	5 S D 38	浅鉢	口縁～底部	(66)		7	3	刺突文	
	6 X-O	深鉢	口縁部			7	4	押圧縄文	R
	7 F-4	深鉢	口縁～体部上			7.5	4	縦位割目押圧縄文・弧状押圧縄文	LR
	8 S D 38-F	深鉢	体部			8	4		LR (結節有)
	9 H-5	深鉢	体部上			11	4	押圧縄文	L
	10 S K 74	深鉢	口縁部			6	4	波状渦巻陰帯文(陰帯上に割目) 交互刺突文・楕円状区画文	
	11 S D 38	深鉢	口縁部			9	4	陰帯文・押圧縄文(陰帯上)	LR
	12 S D 38	深鉢	口縁部			11	4	斜行波状陰帯文・押圧縄文(陰帯上) 陰帯文・押圧縄文(陰帯上)	LR
	13 X-O・E	深鉢	口縁部			11	4	陰帯文・押圧縄文(陰帯上)	LR
	14 X-O・E	深鉢	体部			8	5	沈線文・押圧縄文	LR
	15 S T 1	深鉢	体部			9.5	5	陰帯文	LR R
	16 X-O・W	深鉢	口縁部			7	5	渦巻陰帯文・陰帯文・押圧縄文	LR
	17 X-O・E	深鉢	口縁部	(283)		8	5	刺突文・楕円把手	
	18 X-O・E	深鉢	口縁部			6	5	刺突文・波状陰帯文	
	19 S D 38	深鉢	口縁～体部上			7	5	波状陰帯文・陰帯文(突起有)	LR
	20 S D 38	深鉢	体部			7.5	5	クラック陰帯文	RL
	21 X-O	深鉢	体部			6	5	陰帯文・沈線文	RL
	22 C-1	深鉢	口縁部			6	6	縦位平行沈線文・縦位割目文	
	23 S T 1	深鉢	口縁部			8.5	6	渦巻沈線文	
	24 X-O・W	深鉢	体部			9	6	渦巻沈線文	原体不明
	25 S D 38	深鉢	体部			7	6	渦巻隆沈線文	RL
	26 X-O・W	浅鉢	口縁～体部			7	6	弧状沈線文	
	27 S D 38	深鉢	体部下～底部			7	6	縦位沈線文	LR
	28 X-O・E	深鉢	体部			8	6	沈線文	RL
	29 C-2	深鉢	体部			6	7	隆沈線文	RL R
	30 C-2	深鉢	体部			5.5	7	隆沈線文・渦巻沈線文	原体不明
	31 S K 60	深鉢	体部			8	7	楕円沈線文	RL
	32 X-O・W	深鉢	口縁部			7	7	押圧縄文	RL
	33 S K 22	深鉢	体部			7	8	沈線文	LR
	34 X-O	深鉢	体部			7.5	8	沈線文	RL
	35 S K 64	深鉢	体部			6	8	隆沈線文	
	36 S T 2	深鉢	体部			6	8	隆沈線文	
	37 S T 1	深鉢	口縁部・体部			8	9	刺突文・楕円沈線文	LR
	38 X-O	深鉢	体部			7	9	刺突文・楕円沈線文	
	39 S T 1	深鉢	体部			11	9	刺突文・沈線文	LR
	40 S K 4	深鉢	体部			7	9	縦位平行沈線文・縦位割目文	
	41 S P 42	深鉢	体部			6	9	沈線文	R (摺糸文)
	42 H-5	深鉢	体部			6	9	渦巻沈線文	LR
	43 S D 11	深鉢	体部			7	9	斜位沈線文	原体不明
	44 X-O・E	深鉢	口縁部			7	10	縦位平行沈線文・縦位割目文	RL
	45 S T 1	深鉢	口縁部			6	10	縦位平行沈線文・縦位割目文	LR
	46 X-O・E	深鉢	口縁部			8	10	沈線文・縦位割目文	RL
	47 X-O・E	深鉢	口縁部			7	10	波状沈線文	RL
	48 B-1	深鉢	口縁部			6	10	沈線文	RL
	49 S K 9	深鉢	体部			5	10	沈線文	LR (横・縦)

表5 縄文土器観察表(2)

探図No.	出土地点	器種	部位	計測値(mm)			分類 (群)	文 様	縄 文	
				口径	底径	器厚				
5	50	S T 1	深鉢	体部			7	10	沈線文	RL
	51	S T 1	深鉢	口縁部			4	10	沈線文	LR
	52	S T 1	深鉢	口縁部			7	10	横位沈線文	LR
	53	S T 2	深鉢	体部			8	10	沈線文	RL
	54	X-O	深鉢	体部			7	10	条線文	
	55	X-O	壺	体部			6	11	貼瘤(壺上に刻目)	原体不明
	56	S K 4	浅鉢	口縁部			6	11	貼瘤	
	57	G-5	深鉢	体部			6		横位平行沈線文・斜位刻目文	原体不明
	58	S T 2	深鉢	体部			9			L(摺糸文)
	59	S T 1	深鉢	体部			8			L(0段多糸)
	60	S D 11	深鉢	体部			8			RR
	61	S T 1	深鉢	底部~体部下		(66)	6			RL
	62	S D 38	深鉢	底部~体部下		(108)	8		底部・網代直	
63	S D 38	壺	底部		(120)			底部・網代直		

表6 石器・石製品観察表

探図No.	出土地点	種別	器種	石材	計測値				破損	調 整	
					長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)			
5	64	E P 95	石器	剥片	頁岩	43	42.5	12.5	18.4	完形	
	65	S K 4	石器	剥片	頁岩	43	32	6	9.4	完形	
	66	C-3	石器	剥片	頁岩	22	27	7	3.8	完形	
	67	S T 1	石器	剥片	頁岩	34	29.5	11.5	12.2	完形	
6	68	S P 24	石器	剥片	頁岩	41.5	53	13	35	完形	
	69	S K 4	石器	石匙	頁岩	42	74	10.5	21	完形	両面加工により、刃部・つまみを作出
	70	S K 103	石器	剥片	頁岩	27	52	7.5	10.4	破損有	両面調整加工・背面右側縁の一部を調整加工
	71	S K 4	石器	搔器	頁岩	(56)	(17.5)	7.5	4.5	1/2破損	縦長剥片・背面側の左側縁の一部を調整加工
	72	D-3	石器	削器	頁岩	61	32	14	18.2	完形	片面加工・背面側の両縁に調整加工を施し、刀部を作出 背面側の基部左縁の一部を両面加工
7	73	S D 38	石器	石匙	頁岩	86	21	18	26.5	完形	両面調整加工・先端部の両面に細かい二次加工
	74	S K 10	石器	磨石	砂岩	206	(118.5)	74		1/2破損	磨面は二面
	75	X-O	石製品	石棒	凝灰岩	(208)	91	78		下部破損	体部の全面にわたり磨直

## VI 調査のまとめ

### 1 調査のまとめ

中地藏遺跡では、縄文時代、平安時代、近世の遺構が確認された。

縄文時代の遺物では、前期大木3・6式土器、中期大木7a～10式土器、後期前葉・中葉・後葉の縄文土器が出土している。石器では、石匙、石筥、削器、二次加工のある剥片、磨石等が出土した。石製品では、中期と考えられる石棒が出土している。1区東端に広がる遺物包含層からは、大木7a式から8a式にかけての土器が出土している。

周辺の縄文時代の遺跡では、中地藏遺跡から約200m東側の同じ段丘面上に、中期や晩期の遺物が出土する地藏堂遺跡がある。中地藏遺跡では、中期の遺物包含層の他に明確な遺構が認められなかったが、隣接する地藏堂遺跡が当該期の集落の中心部分であった可能性が考えられる。立谷川流域には、他に上荒谷遺跡がある。前期前葉の時期が主体の遺跡であるが、中期中葉の遺物も認められる。立谷川の下流1.2kmの地点には、大森A遺跡がある。前期前葉の他、後期中・後葉の遺物が確認されている。また、中地藏遺跡の北東側に広がる丘陵地には、縄文時代の遺跡が多く分布し、中期では、正法寺遺跡、伝覚平遺跡、南山遺跡、石礎山遺跡、後・晩期の宮田遺跡などがある。

平安時代では、遺構については、堅穴住居跡3棟(ST1・2・3)、土坑31基、溝跡1条(SD38)、ピット、性格不明遺構4基(SX19・47・57・91)が確認された。

堅穴住居跡は、3棟とも主軸方向がほぼそろっており、同時期と考えられるが、遺物の出土状況や接合関係から、ST1よりもST2が後に建てられた可能性も考えられる。集落の年代は、9世紀後半と考えられる。

土坑については、形状や遺物の出土状況から、機能的な相違が認められる。遺物等が比較的廃棄されているものでは、SK4・SK8・20・22・28・62・90などがあり、廃棄土坑的な性格が考えられる。遺物の出土が少ない、あるいは出土しないものでは、SK7・26・27・48・61がある。土坑の底面が焼けているものでは、SK9・10がある。SK9では、遺物や炭化物の出土が多く、屋外炉としての用途も考えられる。SK10は、土坑の約半分が強く被熱しており、性格は不明である。

性格不明遺構であるが、SK19は、広範囲にわたって強く被熱しているため、鍛冶関連の遺構の可能性が考えられる。ST1よりも新しい。SX47は、焼土の広がりとして検出されたが、カマドあるいは炉跡の可能性もある。SX57・91は、全体の形状が不明であるが、一部方形に近い形状や、カマドの可能性も考えられる遺物を含む焼土の広がりがあることなどから、堅穴住居跡であった可能性も考えられる。

近世では、掘立柱建物跡(SB29)1棟、溝状遺構(畑跡)、土坑が確認された。畑跡は、SD11～17、SD49～53、SD74～88の大きく3つのまとまりで捉えられる。SB29は、SD11～17よりも新しい。

## 2 平安時代の土器について

中地蔵遺跡出土の平安時代の土器について、編年的な位置づけと内容について述べたい。

土器の分類は、種別を、Ⅰ—須恵器、Ⅱ—赤焼土器、Ⅲ—土師器とし、器種は、A—坏、B—高台付坏、C—蓋、D—甕、E—壺に分類した。各々の器種は、器形、調整技法等により細分される。分類内容については、表7、図28・29図に示した通りである。

ST1 堅穴住居跡では、覆土中から人為的な一括廃棄と考えられる多量の土器が出土し、遺跡内の全体的な土器様相の把握が可能であると思われる。以下その内容について述べたい。

覆土出土の須恵器坏では、1・3・4・6類がある。主体は3・4類である。赤焼土器坏では、1・4類がある。土師器坏では、内面黒色処理のa類と、黒色処理が施されないb2類がある。b2類は、赤焼土器坏4類と器形が類似し、外面には横方向のケズリが、内面にはミガキが施され、底部には縄物圧痕がある。高台坏では、須恵器・赤焼土器・土師器があるが、器形が判別できるものはない。高台は断面三角形状で低い。F1や覆土上層からは、高台内に菊花状圧痕が施される土師器高台付坏a2類が出土している。甕では、小型の土師器甕1類と大型で長胴の4類がある。外面には縦方向のハケメが、内面には横方向にハケメが施され、ハケメ調整後に口縁部にナデ調整を施す。ほとんどの個体の底部には、縄物圧痕が認められる。その他、須恵器壺1類(広口壺)、2類(長頸壺)、須恵器甕がある。

床面及び住居内施設の土器の内容であるが、床面では須恵器坏5類、小型の土師器甕1・2類、大型の土師器甕4類が共伴する。カマドでは、覆土中から、赤焼土器高台付坏、土師器甕1・4類が出土し、カマド床面からは、土師器甕4類が出土している。カマド脇の貯蔵穴EK93からは、内面黒色処理の土師器高台坏a1類、赤焼土器坏4類、土師器甕が出土している。北東隅の貯蔵穴EK94からは、赤焼土器坏4類、土師器坏a1類、土師器甕1類が出土している。その他、周溝(E D92)床面から、須恵器坏2類が出土している。床面と覆土出土土器の内容にはそれほど相違は認められない。

表8にST1出土土器の破片数を示した。傾向であるが、坏類の口縁部破片数では、赤焼土器坏の割合が5～6割を占め、須恵器坏が3割、土師器坏が1割程度である。坏に比べて、高台坏の出土は少ない。また、蓋の出土もわずかである。甕では、土師器の占める割合は9割以上で、赤焼土器の甕はまれである。土師器甕の多くは、1類と4類で構成される。

次に、ST1出土の須恵器坏の法量分布を第30図に示した。口径は129.5～150mm、高さは36.5～53.5mmの範囲に分布する。覆土と床面の間に特に相違は認められない。高径指数は、27.4～35.7の範囲に分布する。底径指数は0.35～0.46の範囲に分布し、ばらつきがある。赤焼土器・土師器の法量分布では、口径は116～136mm、高さは36.5～52mmの範囲に分布する。赤焼土器と土師器の明確な法量の違いは認められない。高径指数は、27.7～39.7の範囲に分布し、多くは35～40の間に入る。また、底径指数は0.40～0.45の範囲に分布する。

ST1出土土器と他の遺跡から出土した土器との比較で年代を位置づけてみる。

山形市今塚遺跡(須賀井・植松他：1994) S D377・625溝跡からは、平安時代の土器がまとめて出土し、S D377では、9世紀第2四半期の年代が与えられている(阿部・水戸：1999)。

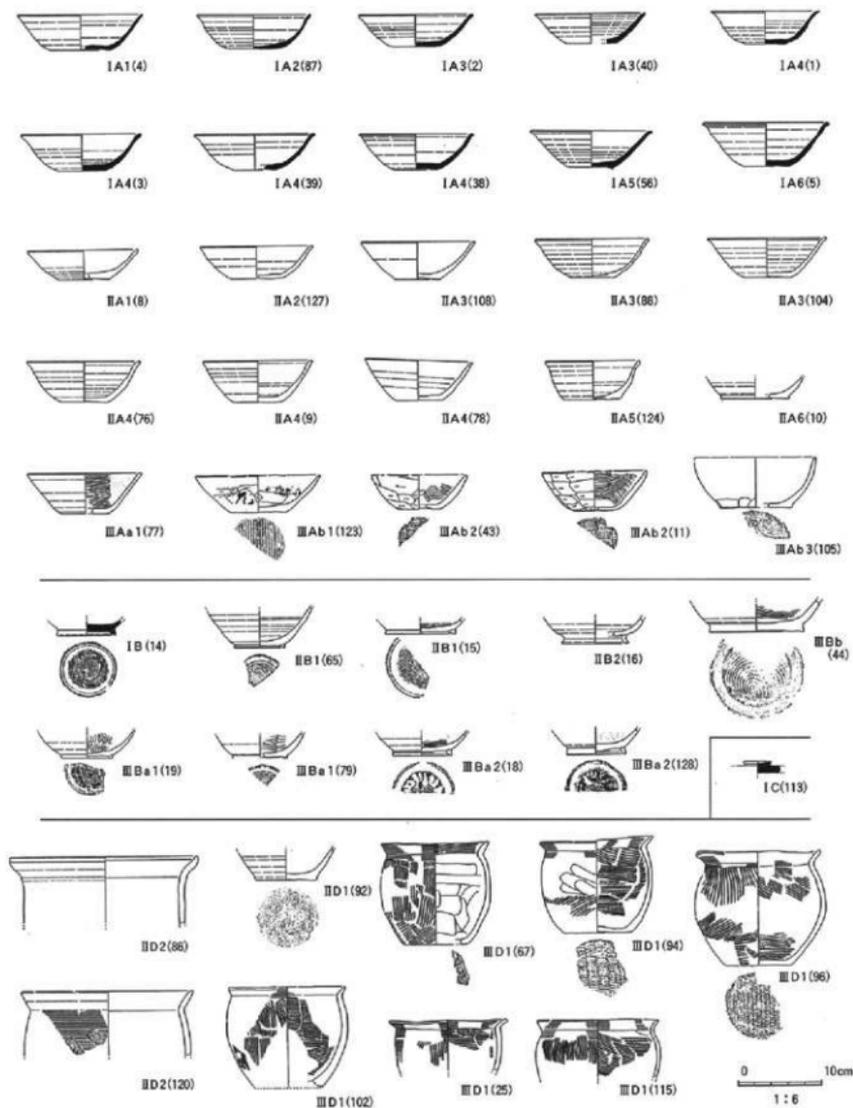
これらの溝跡出土の須恵器杯と、中地藏遺跡の須恵器杯を比較すると、高径指数では中地藏遺跡の方が若干高い値を示し、底径指数では、同程度か今塚遺跡の方がやや高い値を示す。寒河江市平野山古窯跡群第12地点の報告では(佐藤・須賀井：1998)、SG31捨て場の土器群(D群)は、9世紀第4四半期の年代が与えられている。D群土器杯類の高径指数や底径指数の傾向は中地藏遺跡の杯類の傾向と類似している。以上より、ST1出土土器の年代は9世紀後半の範囲に位置づけられると考えられる。

また、中地藏遺跡で特徴的な土器として、外面にケズリを施し、底部に繩物圧痕がある土師器杯b1・b2・b3類、中型で口縁部が短く外反し、底部に繩物圧痕がある土師器甕1類、長胴大型で、底部に繩物圧痕がある土師器甕4類がある。これらは、口縁の調整に一部ロクロを使用したと思われるが、成形に粘土紐の輪積みを行い、焼成も一定していないことから、集落内で製作されたと考えられる。これらの土器の類例としては、以下の遺跡があげられる。山形市境田C遺跡(渋谷：1982)では、土師器甕1類、底部を欠くが大型で長胴のハケメが施される甕がある。甕の底部に繩物圧痕があるものがしばしば見受けられる。また、遺構外出土の土師器杯で、黒色処理され底部に繩物圧痕があるものが認められる。山形市境田D遺跡(渋谷：1984)では、内外面ハケメが施される小型や長胴大型の甕があり、底部には、窯製品によるとみられる圧痕が残っているものがある。天童市綿掛遺跡群では(川崎：1978)、底部に繩物圧痕のある土師器甕がある。河北町月山堂遺跡でも、土師器甕1類・4類が認められる。中山町達磨寺遺跡では、遺構外出土遺物の中で、底部に繩物圧痕のある土師器甕が出土している。

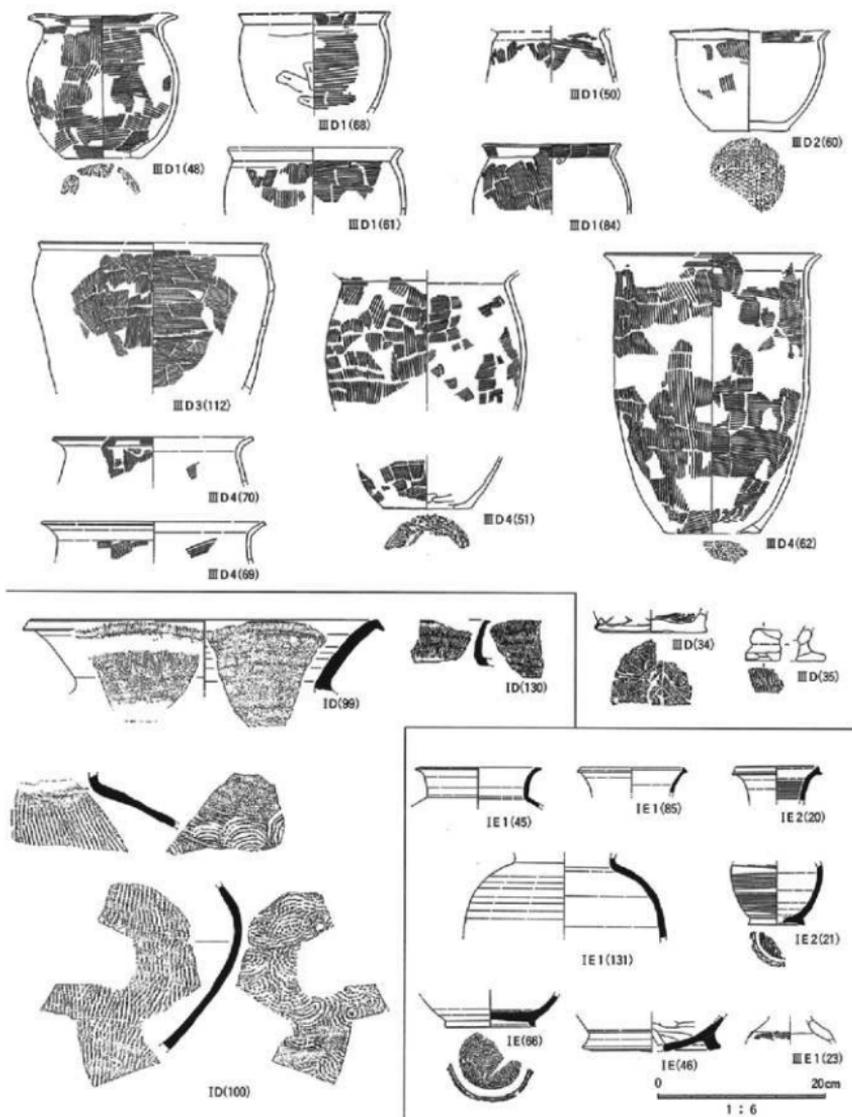
中地藏遺跡の北東側の丘陵地には、二子沢窯跡群などを中心とした、奈良・平安時代の窯跡が複数分布している。赤焼土器杯・須恵器杯・高台付杯・蓋・甕などは、これらのいづれかの窯跡から供給されたものと考えられる。しかし中地藏遺跡では、窯跡から距離的に遠くはないものの、杯類の一部や煮沸用の甕の多くを集落内で製作した土師器でまかなっていたと考えられる。このような土師器の特定の器種について、集落内で製作し供給するあり方が、山形盆地内の限られた時期的地域的なものなのか、供給先の窯に要因があるのか、今後の課題である。

#### <参考文献>

- 山形市市史編さん委員会：1973『山形市史 上巻 原始・古代・中世編』  
 川崎利夫他：1978「第2部 考古編」『天童市史 別巻上 地理・考古編』  
 渋谷孝雄：1982：『境田C遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第62集  
 野川主計・高橋郁夫：1982『月山堂遺跡発掘調査報告書』河北町埋蔵文化財調査報告書第3集  
 渋谷孝雄：1984：『境田C'・D遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第76集  
 佐藤正俊・渋谷孝雄：1986『達磨寺遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第104集  
 須賀井新人・植松暁彦・黒坂弘美：1994『今塚遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第7集  
 佐藤庄一・須賀井明子：1998『平野山古窯跡群第12地点遺跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第52集  
 阿部明彦・水戸弘美：1999『山形県の古代土器編年』第25回古城櫓官衙遺跡検討会資料



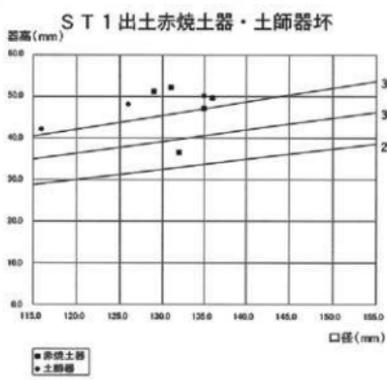
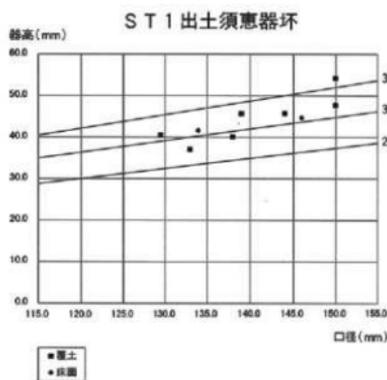
第28図 土器分類図(1)



第29図 土器分類図(2)

表7 土器分類表

種類	器種	分類	ロクロ 使用	口縁部～体部形態		調整		底部形態	正縁 切り出し
				外蓋	内蓋	外蓋	内蓋		
I 須恵器	A 坏	1	使用	底径がやや大きく、底縁から口縁部にかけて直線的に外反する	ロクロ	ロクロ	平底	回転糸切	
		2	使用	底径がやや大きく、内湾しながら立ち上がり、口縁部がわずかに外反する	ロクロ	ロクロ	平底	回転糸切	
		3	使用	器高が低く、内湾しながら立ち上がり、口縁部がわずかに外反する	ロクロ	ロクロ	平底	回転糸切	
		4	使用	底径がやや小さく、内湾しながら立ち上がり、口縁部がわずかに外反する	ロクロ	ロクロ	平底	回転糸切	
		5	使用	底径がやや小さく、口縁部にかけて直線的に外反する	ロクロ	ロクロ	平底	回転糸切	
		6	使用	底径がやや小さく、口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、器高がやや高い	ロクロ	ロクロ	平底	回転糸切	
	B 高台坏	1	使用	低い高台が付く	ロクロ	ロクロ	付高台	回転糸切	
	C 罎	1	使用	リング状のつまみが付く	ロクロ	ロクロ			
	D 罎	1	使用	大型で、口縁部が外反し、体部が丸く膨らむ	タタキメ	アチメ	丸底	明き出し	
	E 甕	1	使用	広口罎	ロクロ	ロクロ	不明	不明	
II 赤土器	A 坏	1	使用	器高が低く、口縁部にかけて直線的に外反する	ロクロ	ロクロ	平底	回転糸切	
		2	使用	器高が低く、口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁部がわずかに外反する	ロクロ	ロクロ	平底	回転糸切	
		3	使用	底径がやや小さく、内湾しながら立ち上がり、口縁部がわずかに外反する	ロクロ	ロクロ	平底	回転糸切	
		4	使用	底径がやや小さく、口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、器高がやや高い	ロクロ	ロクロ	平底	回転糸切	
		5	使用	底径が大きく、底縁から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、器高が高い	ロクロ	ロクロ	平底	回転糸切	
		6	使用	体部の立ち上がり部分がケズリが入り、擬似高台となる	擬似ケズリ	ロクロ	平底	回転糸切	
	B 高台坏	1	使用	低い高台が付く	ロクロ	ロクロ	付高台	回転糸切	
	2	使用	高い高台が付く	ロクロ	ロクロ	付高台	回転糸切		
	D 罎	1	使用	小型の罎	ロクロ	ロクロ	平底	回転糸切	
	2	使用	口縁部がやや内湾気味に立ち上がり、胴で大型になる罎	ロクロ	ロクロ	不明	不明		
III 土師器	A 坏	a1	使用	底径がやや小さく、口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり器高がやや高い	ロクロ	ミガキ ナデ	平底	回転糸切	
		b1	不使用	底径がやや小さく、口縁部にかけて直線的に外反する	ケズリ	ナデ	平底	器物任意	
		b3	不使用	底径がやや小さく、口縁部にかけてやや内湾しながら立ち上がり、器高がやや高い	ケズリ ナデ	ミガキ ナデ	平底	器物任意	
	B 高台坏	a1	使用	低い高台が付く	ロクロ	ミガキ 黒色処選 ミガキ 黒色処選	付高台	回転糸切	
		a2	使用	底面に菊花状圧痕がある	ロクロ	ミガキ 黒色処選	付高台	回転糸切	
		b	使用	大型で、擬似高台が付く	ロクロ	ミガキ	削り出し 高台	回転糸切	
	D 罎	1	一部使用	口縁部が丸く外反し、体部が丸く膨らむ小型の罎	ハナメ	ハナメ	平底	器物任意	
		2	不使用	口縁部が大きく開き、器高が低い小型の罎	ハナメ	ハナメ	平底	器物任意	
		3	不使用	口縁部が丸く外反し、体部上半が膨らむ大型の罎	ハナメ	ハナメ	平底	器物任意	
		4	一部使用	口縁部が外反し、体部が膨らむ膨らむ大型で長胴の罎	ハナメ	ハナメ	平底	器物任意	
E 甕	1	不使用	胴部から腹間にかけてすぼまる甕	ハナメ	ハナメ	不明	不明		



第30図 ST出土坏類土器の量量分布



## 報告書抄録

ふりがな	なかじぞういせきはつかつちょうさほうこくしよ							
書名	中地蔵遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター							
シリーズ番号	第77集							
編著者名	菅原哲文 大村和弘							
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-3161 山形県上市市弁天二丁目15番1号 TEL023-672-5301							
発行年月日	2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかじぞういせき 中地蔵遺跡	やまがたけんやまがたし 山形県山形市 おおあざやまでらあかいし 大字山寺赤石	6201	平成2年度登録	38度 19分 46秒	140度 24分 46秒	19970419 ～ 19990611	600	広域営農団地農道整備事業（村山東部二期地区）
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
集落跡	縄文時代 前期～後期	包含層		縄文土器 石器 石製品				
	平安時代	堅穴住居 土抗 溝	3	土師器 赤焼土器 須恵器 石製品			ST1 堅穴住居跡から、大量の廃棄された土器が出土。墨書土器1点出土。	
	近世	掘立柱建物	1	金属製品 陶磁器				
							(総出土箱数 48箱)	



版 圖





調査区全景(南西から)



遺跡近景(北から)



面整理事業(南西から)



平板実測作業風景



ST 2 精査状況(東から)



調査区全景(南東から)



1区全景(東から)



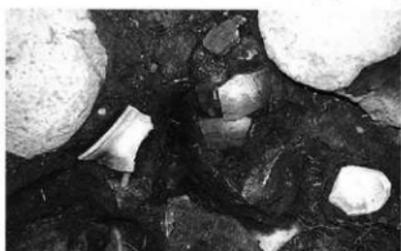
ST 1 検出状況(東から)



ST 1 遺物出土状況(南西から)



EL 54 完掘状況(西から)



EL 54 遺物出土状況(西から)



ST 1 完掘状況(西から)



ST1EK94遺物出土状況(南から)



ST2(手前)・ST1(奥)検出状況(西から)



EL55完掘状況(南西から)



ST2遺物出土状況(北西から)



ST2完掘状況(西から)



ST 3 検出状況(北から)



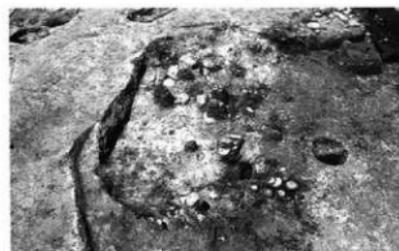
E L 56遺物出土状況(南から)



ST 3 完掘状況(北から)



SK 4 掘り下げ状況(西から)



SK 4 完掘状況(南から)



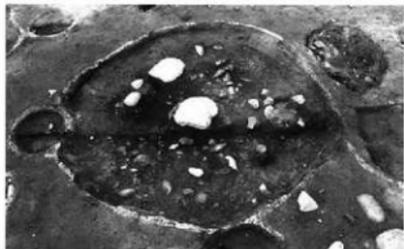
SK 9 遺物出土状況(南から)



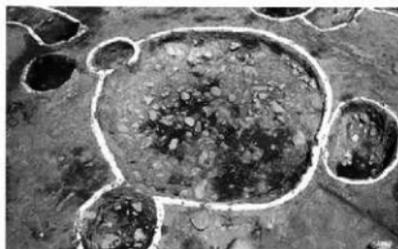
SK 8・22断面(西から)



SK 8・22遺物出土状況(南から)



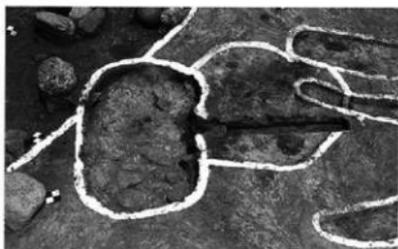
S K 10断面(南から)



S K 10完掘状況(南から)



S K 28遺物出土状況(東から)



S X 47(右)・S K 48(左)完掘状況(南から)



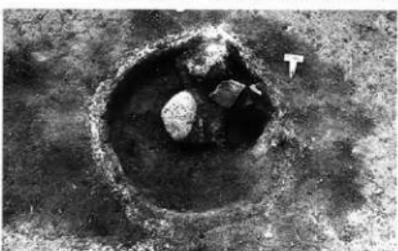
S K 5完掘状況(南から)



S K 105 R P 255出土状況(西から)



S P 24遺物出土状況(北から)



S P 25遺物出土状況(東から)



S X 19断面(南から)



S X 19完掘状況(南から)



S X 57遺物出土状況(東から)



S D 38断面(西から)



S D 38完掘状況(東から)



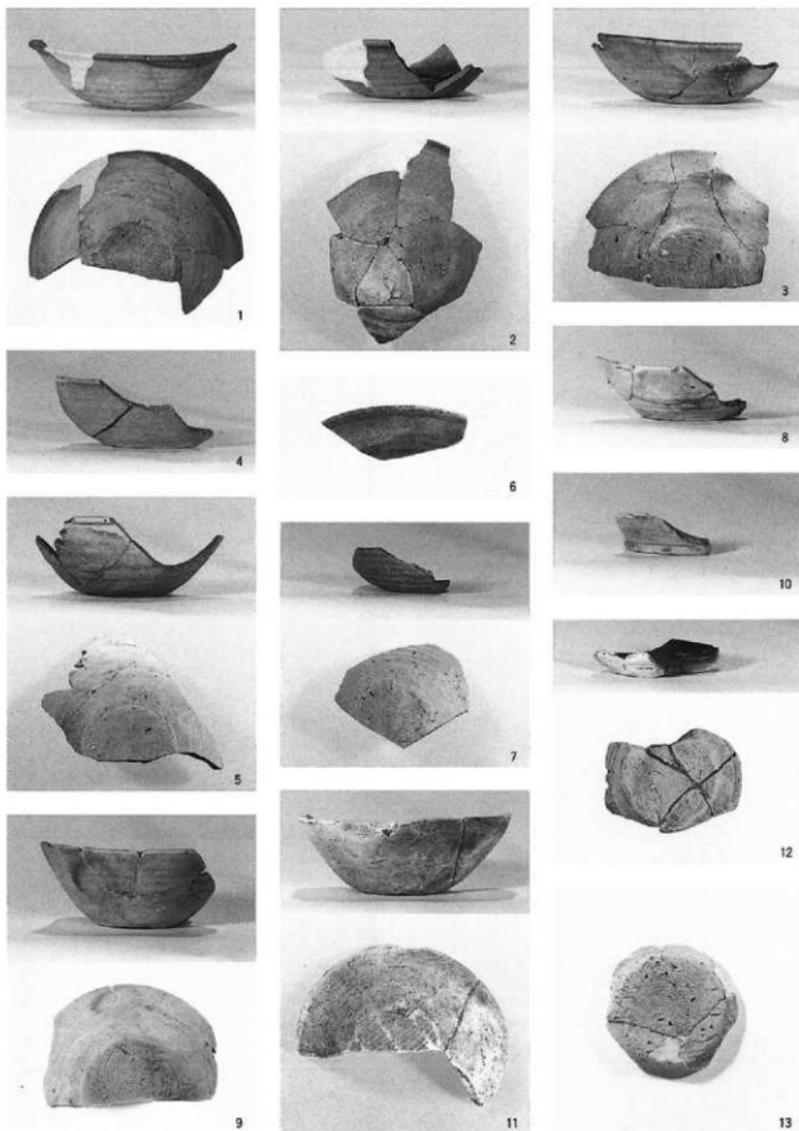
S D 38断面(西から)



S B 29完掘状況(東から)



S D 11・12完掘状況(北から)





14



15



16



17



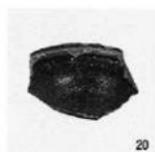
18



19



23



20



24



21



22



27



30



25



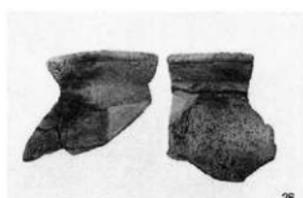
28



29



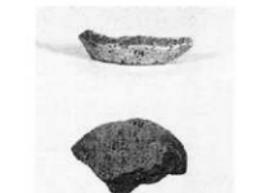
33



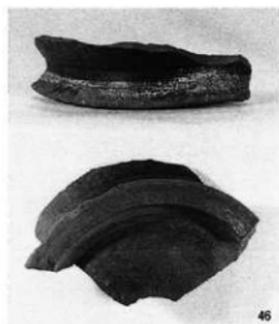
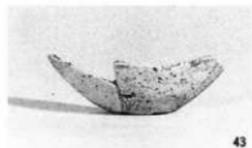
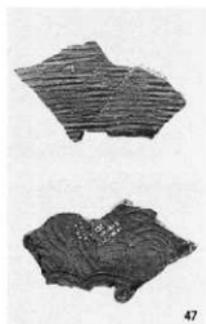
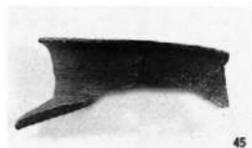
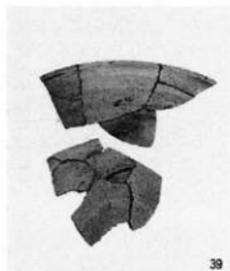
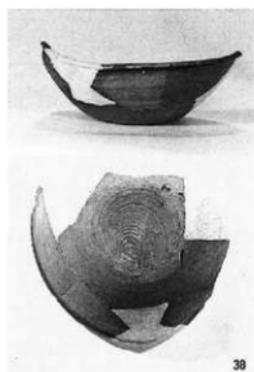
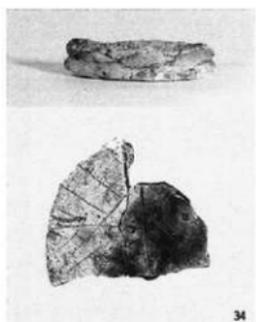
26



32

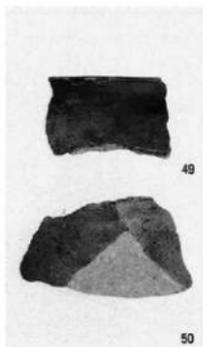


31



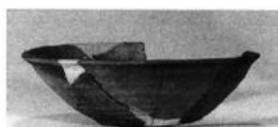


46



49

50



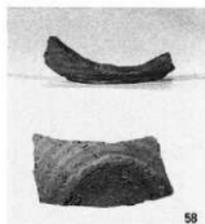
56



53



52



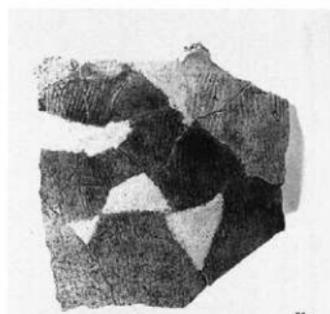
58



54



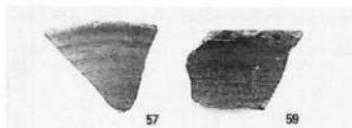
55



51 a

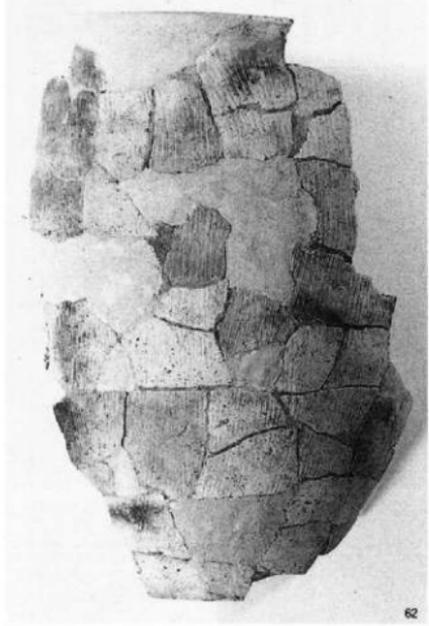
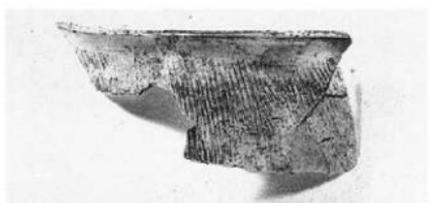
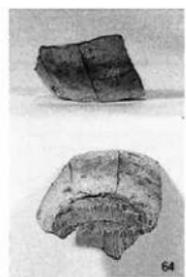
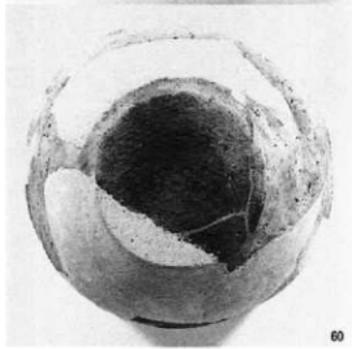


51 b

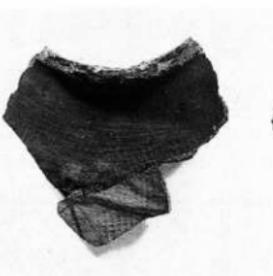
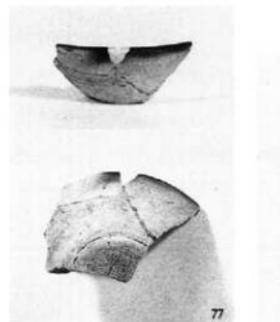
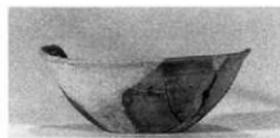


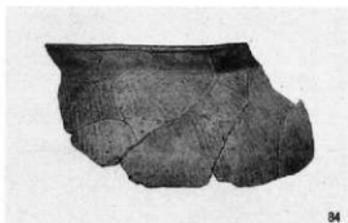
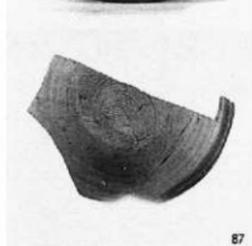
57

59



ST1Y·EL54出土遺物







86



90



92



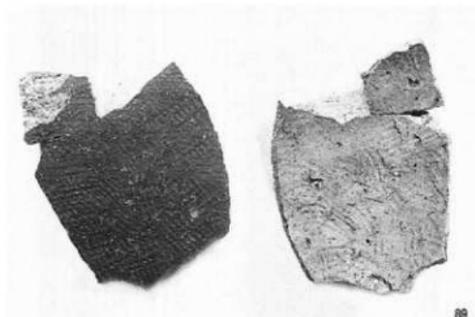
88



91



93

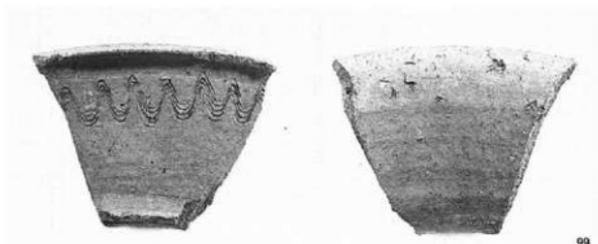


89

94



95



97

98



94



96



97



98



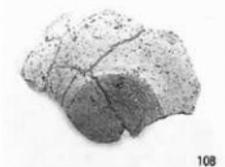
100



103



105



101

106

108



107

109



102



113



117



114



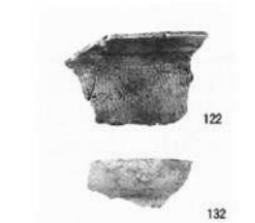
104

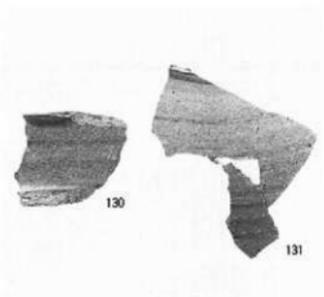


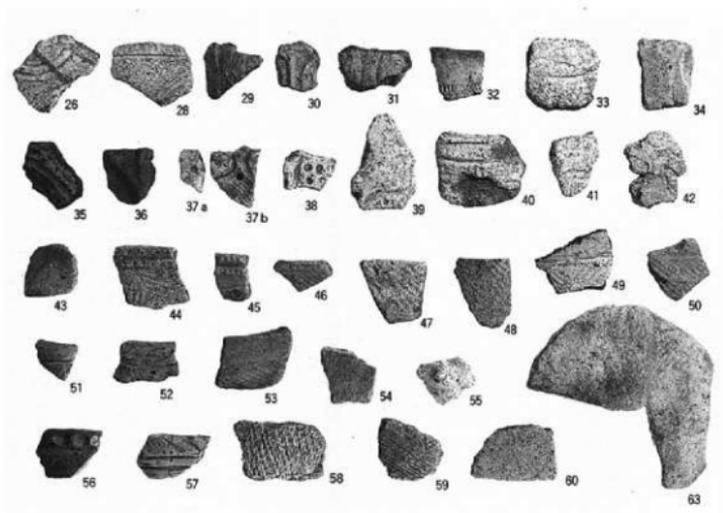
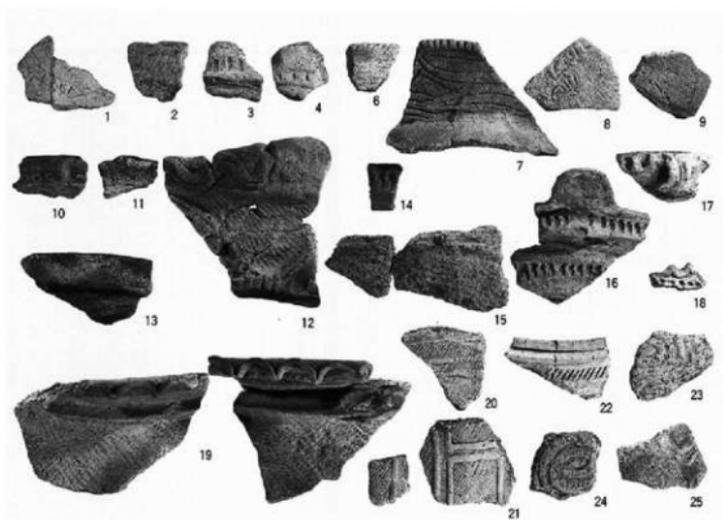
115

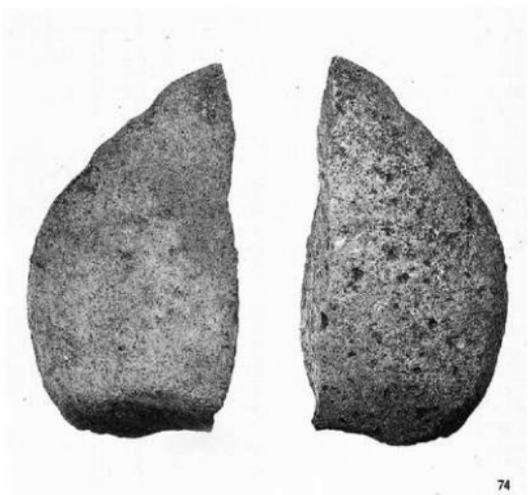


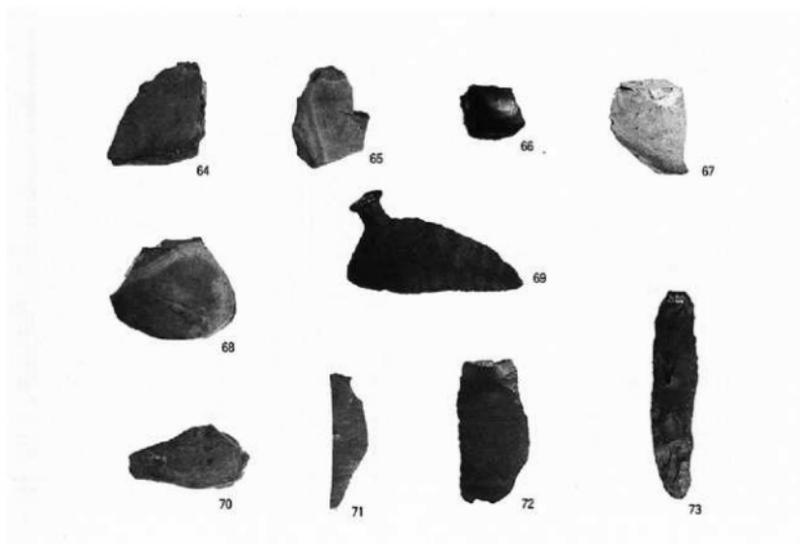
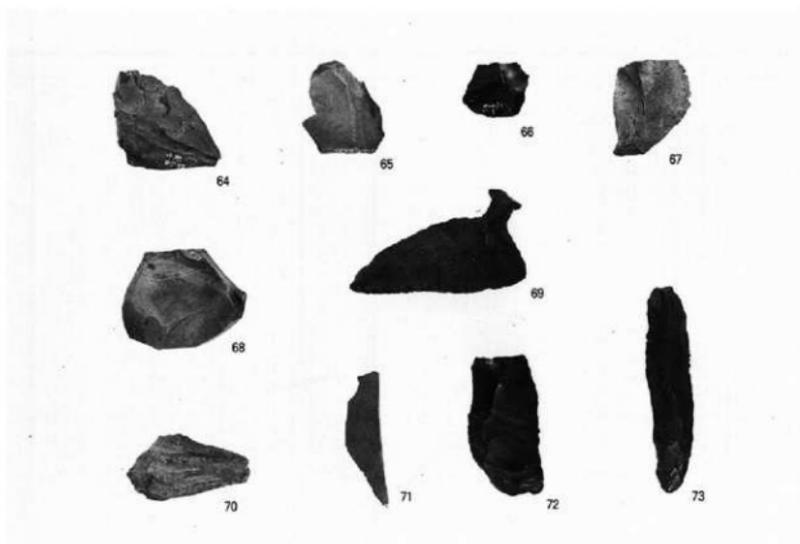
118











---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第77集

中<sup>なか</sup>地<sup>じ</sup>蔵<sup>ぞう</sup>遺<sup>い</sup>跡<sup>せき</sup>  
発掘調査報告書

2000年3月31日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
〒990-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号  
電話 023-672-5301  
印刷 大場印刷株式会社

---

